2006.10

HAMAMATSU UNIVERSITY SCHOOL OF MEDICINE

NEWSLETTER



(新病棟完成イメージ図)

国立大学法人

浜松医科大学 http://www.hama-med.ac.jp Vol.33 No.1

目 次

			_									
Х	1	ン ァ「≕	テ	ー * みァ	マ	田市 (証価、労致、少人集団担収)	<i>+</i> -	盐	文	5 7 2		1
新			等の			・・・・理事(評価・労務・安全管理担当)	口	脉	X)多。	• •	1
<i>ላ</i> ን!	IT IX	只	ਜ ∨੭	ᄱᅜ	71	監事	長名	田谷	正	拳 .		3
						副学長(情報・広報担当)		木	11.	· 修·		
新	任 耶	哉 員	しの	紹	介			•		12		
						健康社会医学講座教授	尾	島	俊	之·		6
						基礎看護学講座教授	\equiv	浦	克	敏·		7
						薬剤部長	Ш	上	純	<u> </u>		8
						事務局長	辻		正	行·		9
						総務部長	渥	美		守·		10
						総務部会計課長	生	熊	道	憲・	٠.	11
						学務部学務課長	大	野	昭	彦·	• •	12
海夕	医学・											
						・・・・・・・麻酔・蘇生学講座助手	-		俊	-		
						実習 · · · · · · 医学科6年	松		みと			
	Bialysto	k 大学	どでの実	習につ)(17	て・・・・・・・・・・ 医学科 6年	大	場	裕	子·	• •	16
大	学	_	ュ		7							
^												17
						(大学法人支援課課長補佐訪問 · · · · · · · ·						
	開拿	学記念	·行事 · ·	入日/四								19
	学生ニ	ュース										21
	サーク	- レ紹介										$\frac{-}{22}$
						好会、ESS)						
	留学生約	沼介 ·										26
	(王		麗欣	ζ. Frε	ancis	s Wamakima Muregi、Anima Iwischütz)						
						高等学校等卒業年別状況 · · · · · · · · · · ·						
	平成 18	年度	(学者選	抜に依	系る!	出身高等学校等の所在する都道府県別状況		• • • •			• •	36
	第 100 🛭	回医師	国家試験	负大学	別合	格状況	• • •	• • • •			• •	37
						き者の医師国家試験合格状況(年次別)・・・・						38
	浜松医	斗大学	医学部	旨護学	科孕	業者の保健師・看護師・助産師の国家試験			- , .			
	표구 10	左っち	그러서를	T/1 Z	ᅿᆖᄼ	공합도 중심 작 휴 수 오구 BB/P 1071						
	平成 18	年3月	月浜松医	科大与	四医4	学部医学科卒業者の就職状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・						40
	平成 18	平るた	洪仏医	外大与	产(大)	学部看護学科卒業者の就職状況 ········ ·····					• •	41
さ	平成 18	平段・		八次	h							42
C	重 学的:					·····解剖学講座教授	佉	族	康	– .		13
						·····基礎看護学講座教授						
海	外	渡		τ̈́	記	坐虎 有 段 丁 時 注	710	Щ				77
114				-		国際眼科学会に参加して						
	가 10 1의		1001 7	, 71 C	, v jii	眼科学講座助教授	佐	藤	美	保·		46
	「海外鴻	航記	のはず	゚ゕ゙゙゙゙゙゙ゕ゙゙゙゙゙゙゙゙゙		泌尿器科学講座教授			誠一			
卒	業	·////thaa	だ	よ		120/4- HR L L J HR/TEGAJA	· •	1-4	H24	- 4"		
•			_		•	医学科17期生(平成8年3月卒業)	熱	海	恵理	栏子 ·		49
						看護学科 5 期生 (平成 15 年 3 月卒業)	西		裕			
編	组	Ĺ	後		記	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·						

WEDDE FILL OFFICER

理事(評価・労務・安全管理担当)

右 藤 文 彦

ジュラシックパークだろうか。恐竜が次々と 追っかけてくる。やっと身をかわしてやり過ごす と、今度は目の前にまたよく似た次の恐竜がいる。 冷血動物「ヒョウカサウルス」だ。岩陰に身をひ そめてスキをうかがっているのは、かの「カハン スウサウルス」なのか。ああ!これは午睡の夢?

担当する仕事の中でも一番悩ましいのは、この「評価」なのです。連日のように「評価」のあれこれに追い回されている。その時間の合間をぬって、非情にもニュースレターの原稿を書くようにと編集部会長からの依頼がきた。なんと「評価」についてである。一瞬、拒否姿勢を示すも「それは許さない」と、部会長の眉間の縦じわが語っている。ようしそれなら、この際本学の皆さんに「評価」の何たるかを知って頂こう。そうすれば仕事の協力をお願いした時など、快く引き受けてくれるだろうと…いわゆるプラス思考である。「8月いっぱいでいなら」となんとか引き受けたのが6月初旬。そろそろ9月になる。もはやこれまでと大きめの腹をくくった。

大学が受ける**外部評価**として、**法人評価**と機関 別認証評価がある。いずれも自己点検の結果を実 績報告書として作成し、この提出書類をもとに外 部からの評価を受ける。

「法人評価」は、法人が社会的に機能しているかどうかを国立大学法人評価委員会(文科省)が評価するものである。まず、平成16年度からの6年間にわたる中期目標を設定する。大項目として、(1)教育研究等の質の向上、(2)業務運営の改善及び効率化、(3)財務内容の改善、(4)自己点検・評価及び情報提供、(5)その他の業務運営に関する重要事項があり、さらにそれらの大項目を細分化して本学では129の評価項目となっている。項目のそれぞれに毎年年度計画を設定して、その

計画がどれだけ実施できたかを翌年6月までに業 務実績報告書として、評価委員会に報告すること になっている。ところがその時期にほぼ並行して 次年度の年度計画を作成して提出しなければなら ない。どこの企画室も二刀流で、計画の調整や資 料の整理に明け暮れする。各企画室からの報告書 を本企画室でまとめて、最終的には総合企画室会 議で検討される。ここまでに要する時間や消費さ れる用紙は、かなりの量になる。「業務運営が効率 よくおこなわれているか」「ペーパーレス化を推進 しているか |とやっているだけに苦笑させられる。 8月に国立大学法人評価委員会によるヒアリング が行われ、9月に項目別評価結果がでる。6年間 通じての達成状況が運営費交付金の額に反映され る(?)とあって、まさに大学の命運をかけた評 価ともいえる。

「機関別認証評価」は、文科大臣から認証をうけ た機関、すなわち大学評価・学位授与機構(独)、 大学基準協会(財)などによって行われる評価と いう意味であり、大学の理念・目標に照らし、教 育研究、組織運営および施設設備などの総合的な 状況を評価するものである。7年以内ごととされ ているが、本学は平成19年度に大学評価・学位授 与機構による評価を受けることが決定している。 評価基準は大学設置基準がベースであり、基準1 から11まで大学の目的、教育研究組織、管理運営 などの項目からなっているが、主に教育研究等の 水準を評価するものである。個々の基準について 自己評価を実施して、報告書を作成し提出するの が19年6月である。教育・研究が主な評価項目と はいえ、情報、会計、総務の各部署にも協力をお 願いする項目がある。法人評価とのからみもあっ て、日程の重なりを避けるために18年の12月ま でに作成する予定としている。19年には大学への 訪問調査もあり、教職員、学生、卒業生などとの 面談が予定されている。この自己評価報告書の結 果がよければ、「基準を満たしている」という合格 通知が20年3月頃にくる予定である。他に外部評

価として、病院を対象として5年毎に行われる 「日本医療機能評価」があり、本学では次は21年 度に受審予定となっている。

大学独自で行う内部評価としての自己点検・評価がある。講座等の業績をまとめ、研究活動の自己点検・評価の一環とした「研究活動一覧」であり、その他運営面も含めた自己点検として、これまで6回公表してきた、「第1~6次自己点検・評価報告書」もしかりである。今後の自己点検報告書は、認証評価報告書をベースにした新しいスタイルの報告書を計画している。教育、研究、診療、大学運営についてさまざまな視点から評価を行い、自己点検報告書とするのである。

これらとは別に、「職員評価」がある。職員評価の目的は、①職域における活性化と意識革命に役立てる ②運営等の改善の資料とし、教育、研究、診療、大学運営等の向上を図る ③社会への説明責任を果たすこと 等である。職員評価は、基本的に"自己評価に基づく評価"としており、各人が仕事の実績評価を報告書としてまとめ、これをもとに責任者が面談など行い評価するという形式をとっている。面談では仕事上の話し合いを密にして、双方プラスとなるような方向性を打ち出してもらうことを希望している。

教員評価は、教育、研究、診療、社会貢献、管理運営の5領域について行われ、各教員は各領域での実績報告とエフォート(重み)を加味した自

己評価結果票を責任者に申請する。責任者は、報告書をもとに面談を行い、自己評価の妥当性を評価する。教務職員、技術職員については、自己申告した実績報告をもとに複数の責任者が面談を行い、目標設定、本務の遂行状況、達成度などを考慮して評価している。

病院職員の評価は、各部局によって様式はやや 異なっており、それぞれ職域に応じた特色のある 評価項目表を作成しており、これらについての自 己評価をもとに責任者が評価することになってい る。

事務職員の評価は、「意欲態度」「能力」「実績」 「総合」などの評価項目を設定して透明性の高いも のを目指している。面接を重視して職員の育成を 目指すという観点から設計されている。

職員評価は、役職、部署(仕事内容)により、そして評価者の基準により、評価結果を単純に比較することはむずかしい。インセンティブに直接関連づけることの困難さもそこにあるといえる。妥当性のある評価システムのあり方について今後さらに検討を進めていきたいと考えている。

評価のあれこれお分り頂けたでしょうか。ひた すら努力・精進致しますので皆様の心こもったご 支援をお願いします。

> 幾評価 越えさりゆけど また評価 はてなむ道ぞ 今日も旅ゆく

法人評価(法人評価委員会)

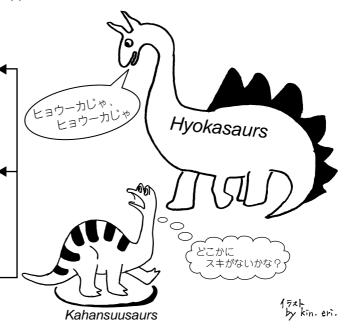
◎中期目標期間の業務実績の評価 目標の設定とその達成状況 (評価は毎年)

認証評価(大学評価·学位授与機構)

◎大学の教育研究・運営面の基準評価(評価は、7年以内ごと)

自己点検・評価(大学独自による評価)

○大学の教育・研究・運営面の基準評価 「研究活動一覧」、「職員評価」など (評価は、毎年)



新任役員等の紹介



監事

長谷川 正 榮

4月より監事を勤めております。前川さんの後任です。どうかよろしくお願いします。生まれも、高校生までの育ちも浜松(浜北)です。正確には、昨年6月まで浜北市竜南であった所で生まれ、育ち、現在もそこから通っております。余暇には家庭菜園を楽しむ事の出来る、のどかな田園地帯です。

昭和39年(東京オリンピックの年)に上京して 以来たどった道を申しますと、大学卒業後大蔵省 に30年近く勤務しました。その間、大阪、名古屋、 香港にも在勤し、財政・金融・外交・社会福祉・ 環境といった分野の行政に携わり、大臣官房審議 官を経て平成7年秋より半年間中小企業事業団理 事を致しておりましたが、ご縁があって平成8年 4月、郷里浜北市の市長に就任し、9年3ヶ月間 (3期目まで)在職した後、昨年6月末浜松市への 合併により職を退き、今日に至っております。国 家公務員時代には公僕として、今となっては絶対 に携わる事ができない様々な貴重な経験を積むこ とができました。市長時代は首長として市政の舵 取りに緊張の連続でしたが、それまでに培った人 脈と経験を活かし全力投球しました。前任者逮捕 による出直し選挙からスタートし、市政への信頼 回復、計画半ばや計画だけの事業の遂行、財政の 建て直しや数多くの新規施策などを次々に行い、 過去30年分の発展を10年足らずで成し遂げたと の評価を頂きました。平成15年は、市制40周年 を祝う数々の事業を盛大に行ない全国発信しまし た。丁度その頃、浜松周辺12市町村の合併問題が 急浮上しました。合併協議は市町村代表、学識経



験者など42人をメンバーとする正式の協議会と、これ以外にも様々なレベルでの話し合いを同時併行して行ないましたから、従来の行政業務、新規の業務は勿論行ないながらでしたので大変なエネルギーを使いました。来年(平成19年)4月の政令市への移行を真のゴールとして昨年7月1日に新浜松市が誕生しました。

昨年暮れに本学監事にとのお話を頂きました。 県西部地域がこぞって誘致した大学であり、附属 病院ではそれぞれの地域の皆さんが大変お世話に なっておりますので、微力ではありますがお役に 立てるならと、お引き受けした次第です。

常勤監事として、市長時代市政の刷新を果たし、 平成17年度も浜北市が閉市するまでのわずか3ヶ 月の予算編成の中で将来の布石となる事業を組み 込ませた実績や、商工農業など様々な分野で活躍 されている経営者、担い手との交流を通じ蓄積で きたノウハウなどを活かして、微力ながら浜松医 科大学のために尽力していくつもりです。

32年の歴史を持つ本学が、地域社会の期待に応えて建学の理念・目的であります「質の高い医師・看護師の育成」「独創的研究・先端的医療の提供」「地域医療の中核的役割」などを果たしていけますよう、監事として皆様と共に本学の更なる飛躍を目指したいと思います。

御挨拶

副学長(情報・広報担当)

鈴 木 修

本年4月より、筒井教授の後任として副学長 (情報・広報担当)兼附属図書館長並びに従来通り の法医学講座教授を兼務することとなりました。 まずは皆様方に御挨拶申し上げます。

私は浜松生まれの浜松育ちで、大学・大学院・助手生活は名古屋で14年間過ごしました。昭和54年に奇しくも郷里の浜松に法医学講師として戻って参り、現在に至っております。浜松医大在任期間は27年以上も経ってしまったことになります。気が付けば既に還暦を迎え、そろそろ店じまいの準備でもしようかと思っていた矢先、この様な大役を命ぜられ、光栄に存じていると同時に大変なことになったと困惑しております。限られた期間でありますので、体力・気力のある限り、大学に少しでも貢献すべく努力する所存であります。

さて、国立大学が法人化されて、そろそろ2年 半になります。この間、色々な変革が行われまし た。遠山前文部大臣が"遠山プラン"を出されて から、当大学でも教員と技術・事務職員は大変な 混乱と膨大な仕事に追われることになりました。 中期計画・中期目標書類ばかりでなく、大学評価・ 学位授与機構による教育改革達成度評価も受ける ため、これも膨大な資料作成作業が必要となりま す。大学執行部もこの様に文部科学省やその他の 評価機関が要求している仕事に追われ、大変苦労 をしています。教授・助教授や他の先生方にも、多 くのしわ寄せが来ています。複雑多岐に亘る入学 試験方式、PBLチュータ義務、CBTの問題作成な どはまだ良い方です。講座の物品管理や棚卸し、 実験室の大気定期検査、研究活動一覧・自己点検 評価作成作業、その他アンケート様式の書類は無 数に来ます。

学長先生や各理事の先生方は本気で浜松医科大学を少しでも良くしようと考え、努力されているのがよく分かります。大変な御苦労で、尊敬に値するものです。法人化とは一種の合理化です。国



の財政を立て直すのに必要なこととは理解できますが、もっと上手にやる方法はなかったものかと考えてしまうことも少なくありません。煩雑すぎる雑務の多さゆえ、本来の仕事にかける時間がとれません。大学の魅力はますます低下し、大学で育った優秀な人材が全国の大学から離れつつあります。ひいては近い将来、日本の科学・医学レベルが下がり、国力も低下する危険性があると心配しています。

文部科学省の考え方は、研究は旧帝大の様な大きな組織に任せようとする方針の様です。本学の様な単科医科大学では、教育を主眼とし、良き医療人を育成すれば良いというわけですが、私はこの様な考え方に反対です。世界に冠たる日本の科学技術の発展の基本は、実は多くの中小企業から生まれています。Serendipityは高額な投資をしたからといって出てくるものではありません。研究者の層は中小の大学になるべく大きく拡げるべきです。地道な研究で失敗を繰り返していくうちに、瓢箪から駒が出てくることが多いのは確かです。

話しを情報・広報に戻しましょう。今年の4月に本職に任命された際、学長先生から当大学のホームページを充実する様指示がありました。ホームページを開いて検討した結果、多数部分に不備が認められ、各教員の先生方や事務職員の方々にお願いして、何とか恥ずかしくないものにした積りですが、まだ色々と難点があると思います。どうぞ改めて御覧になって、問題点等がございましたら、ぜひ御一報頂きたく存じます。現在、英文の"大学概要"を準備しており、国外からのアクセスにもスムーズに対処したいと考えていま

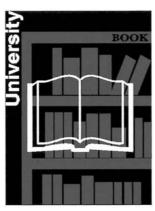
す。

それから私の担当で最も重要なものとして、各所に点在している情報処理システムの維持・管理ならびに、研究活動を主体とするデータベースの構築があります。この大事な仕事においても、学内の専門知識をお持ちの方々に助けて頂かなくてはなりません。この方面にも課題が山積しております。また、パソコンからの医療情報漏洩事件を

契機に、全学のパソコンの基本台帳を作成すべく 現在鋭意準備中です。

私としては、なるべく雑務を効率化し、重複する作業や会議を省き、研究・教育に十分な時間を割くことのできるアカデミックな大学環境を取り戻し、優秀な人材が当大学に停まることを切に願うばかりです。今後とも御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。









新任職員の紹介

疫学研究へのお誘い

健康社会医学講座教授

尾島俊之

今年4月に健康社会医学講座教授を拝命致しました。担当領域の中でも、私の専門は、疫学、公衆衛生学です。世の中が必要とする解くべき課題について、種々の制約条件の中で、最善の研究計画をたてることは、推理小説を解くような、また芸術作品を作り上げるような楽しさがあります。

疫学研究の基本は2群を比較することにあります。症例群と対照群、曝露群と非曝露群、介入群と対照群の比較などの中で、どの研究デザインが自分の課題に最も適するかを考える必要があります。Evidence Based Medicine (EBM) において、Randomized Controlled Trials (RCT) が最もエビデンスレベルの高い研究デザインであるという表をしばしば見かけます。RCTは優れた研究デザインですが、倫理的問題、外部妥当性、実行可能性などの短所もあります。RCT以外の研究デザインの出番は非常に多いと思います。RCTの倫理的問題のひとつとして、仮説が観察研究によって十分に検討されていない段階、逆に仮説がほぼ確立した段階で行うことは倫理的ではなく、その間の極短い期間のみRCTが許されると考えられます。

Bias (偏り)をいかに小さくするかということも難しいポイントです。一般臨床においては、正しく診断するということは非常に重要で、そのため、臨床家の先生方は、症例のinformation bias (情報の偏り)を小さくすることに心を砕くことが多いように思います。一方で、疫学研究という視点



で考えると、特に対照などの selection bias (選択の偏り)を小さくすること、またinformation bias の程度を比較する 2 群で同程度にすることをより重視します。総合的に考えて、診断の精度や調査票の分量についての妥協が必要になることも多いでしょう。RCT 以外のデザインの場合には、どのような confounding factor (交絡因子) があるかを洞察して、その情報を収集することも重要なポイントです。最後に、偶然誤差については、研究計画時の必要サンプルサイズの計算や、データ収集後の統計分析で対応することになります。

最近の疫学研究は大規模化が進んでいまして、 一講座では実施不可能なものが多くなっています。 また、種々の疾病や課題について考えていくと、 十分な疫学研究が行われていない領域が沢山残されていると思います。前任地の自治医科大学では、 循環器内科、産婦人科、精神科、消化器外科、小 児科、地域医療学などの先生方と共同研究を行い、 また母子保健、高齢者、生活習慣病、感染症など の疫学研究も行ってきました。浜松医大におきま しても、学内の他講座の先生方や、他大学の先生 方と積極的に交流したいと考えております。お困 りのテーマなどありましたら、是非、共同研究の お声をかけていただけるとありがたく思います。

教授就任の挨拶

基礎看護学講座 教授 三 浦 克 敏

私はこれまで13年間病院病理部で病理診断に携わってまいりました。このたび4月から基礎看護学健康科学で病理と解剖を担当することになりました。新天地に移りあわただしく4ヶ月が過ぎ、漸く夏休みに入ったところです。

専ら病院のドクターを対象に病理診断を行っていた立場から、看護師を育てる立場に変わり、お付き合いする顔ぶれも一新し、新しい経験を積ませていただいております。

病理学は兎も角、解剖学の教科書を開けるのは 医学部2年生以来のことで、学生時代に使った金 子丑之助の教科書はホルマリン臭とカビ臭さから 見る気にならず、新しい時代の教科書を取り寄せ てみました。いずれも、カラー印刷に加えイラス トや写真が豊富であり、眼に優しいわかりやすい 教科書に変わっていました。解剖学は医学の基礎 中の基礎というべき学問で、人体の基本構造を学 ぶものです。ただ、構造を覚えるのみでは味気な く、機能や病気と結びつけることで、興味をもっ てもらえるように工夫していくつもりでおります。 機会をみつけ、本物の臓器や写真をみせて、感動 できる授業にしていくつもりでおります。

病理学は病気の原因や成り立ちを学ぶ学問です。数多くの病気が存在する中にあって、病気を腫瘍、炎症、免疫、循環障害、代謝障害、先天異常などの基本病変に分類し、総論的に病気を理解し、かつ器官系統別に分けて個々の病気を比較検討していく方法は、病気の本質を捕まえて、理解を深めることができる優れた方法と思います。看護学科では内科や外科といった臨床科別の講義がないので、病理の時間にできる限り、臓器や組織の写真をみてもらい、病気の本質に触れる機会をもって



もらうつもりでおります。

研究面ではアミロイド症、結晶沈着症など、疾患中心の研究を地道に続けていきたいと思っております。浜松ホトニクスとのデジタル顕微鏡、血中がん細胞の検出、耳鼻科との頭頚部腫瘍、ウイルス感染症、泌尿器との前立腺癌、移植などの共同研究も進めていこうと考えております。一人だけでは力不足ですので、皆様方と協力して研究が進められればと考えております。

診療面では、病理診断を一生の仕事として今後とも続けていく所存です。病理医が全国に2000名足らず、静岡県では35名余り、全国の病理専門医の平均年齢51歳の現状を少しでも改善すべく、新しい人材の育成や病理医の研修に協力していくつもりでおります。

私は浜松医大の1期生で、留学と静岡県立総合病院時代を除き、卒業以来ずっと浜松医大にお世話になっております。この大学の卒業生が大学に愛着を感じることができるのは、大学に'人がいる'ことが重要と考えます。教えたり教えてもらえる人、共に学んだり遊んだりしてくれる人、悩みを共感したり相談できる人、などなど大学はいろいろな人が集まってできています。あと3年で卒後30年になろうとしていますが、浜松医大に居たからこそできたことが多々あると感じております。今後とも浜松医大のために全力を尽くす覚悟でおりますので、ご指導ご鞭撻よろしくお願いいたします。

自己紹介

医学部附属病院薬剤部 教授·薬剤部長

川上純一

本年度より、病院薬剤部に参りました川上純一と申します。私は大阪の生まれで、6歳まで大阪と神戸で過ごしました。たまに、関西なまりが出るのはそのためです。小学生から30歳までは東京人でした(実家も都内)。中高時代は、渋谷に程近い私服の学校だったこともあり、都会にいても自由に伸び伸びとしていました。大学に入って進路を考える際に、幅広く化学・物理学・生物学に根ざした応用科学である「薬学部」に興味を持って進学しました。

講座配属(卒業実習や大学院での研究を行う部屋決め)では、迷わずに「病院薬剤部」を選びました。それは、科学と社会との接点であり、薬が使われている医療現場で、実務や薬剤学研究などの多くを学びたいと思ったからでした。しかし当時では、それはとても珍しい進路選択であった様です。と申しますのは、その大学で病院薬剤部に院生として進学したのも、そこでコースで学位を取ったのも、実は私が第一号生という状況でした。

博士課程修了後も、引き続きそこで3年働きました。院生の時も含めてこの間に、調剤などの様々な薬剤業務の基本を身につけると共に、薬物の体内動態や副作用・相互作用に関する研究を始めました。この頃から他の土地でも暮らしてみたくなり、学生時代から旅行好きだったこともあって、東京を離れました。

まずは、風車と木靴と酪農で有名(要するに田舎)なオランダのライデン大学で2年間過ごしました。ライデンは長崎から戻った「シーボルト博士」が住んだ街であり、「蘭医学」や科学史に興味のある方はご存知かと思います。在外研究のテー



マは、中枢神経系への薬物分布に関する基礎的な 内容だったのですが、その間を利用して、各地の 病院・薬局、薬剤師会、大学薬学部、保健行政機 関などを訪問させて頂きました。これを通じて、 国によって異なる医療事情、薬事制度、薬剤師の 活動等に興味を抱いたことが、帰国後の薬剤疫学、 医療政策科学、国際交流などの研究や活動につな がりました。

オランダで暮らしていた時、突然夜中に日本からFAXが入り、富山医薬大の病院薬剤部へ異動することになりました。富山には6年間おりましたが、医学部・薬学部での教育や種々の臨床薬剤業務の傍ら、薬物動態などに加えて、和漢薬の適正使用に関する研究も始めました。今日でも、富山大では刻み生薬を用いた煎じ薬を和漢診療に使用しています。和漢調剤室は、いわば量り売りの「お茶屋」のような雰囲気でして、一度、見学に行かれることをお勧め致します。

そして、本年4月より橋本前薬剤部長の後を引き継いで本学に参った次第です。分からないことや不慣れな点も多々ございますが、本学附属病院における医薬品使用の質向上と病院経営・運営への貢献を目標に精一杯がんばりたいと思います。そのためには学内の皆様方からのご指導とご協力を賜りたく存じます。今後共、薬剤部職員ならびに私のことをどうぞ宜しくお願い申し上げます。

浜松医科大学に赴任して

今年の4月に着任致しました辻でございます。 どうぞよろしくお願い致します。簡単な自己紹介 をさせていただきますと、北海道は函館の生まれ で、見た目の特徴は、刺激的な言い方を避けて少 していねいに言えば、「頭髪にはあまり恵まれず、 体重にはかなり恵まれている」というような感じ です。

これまでの勤務・居住は、大学関係機関として は浜松医科大学が8機関目の勤務となり、生活す る土地としては浜松が10都市目です。仕事として は、主に財務関係に携わっております。その関係 でこの浜松医科大学の土地等の交換取得の仕事に も関わったことがあります。

各国立大学では、法人化後、仕事のやり方一つにしても新しい経験を積み重ねながら、職員が一丸となって改革を進めてきており、3年目に入りました。浜松医科大学にとってもこの18年度、19年度は本中期目標の期間における業務の実績についての評価に関して非常に重要な年度であり、身が引き締まる思いがしています。

話は余談となりますが、評価で思い出しましましたが、前任地の宮城県の隣に山形県がありまして、そこの名物の一つに「そば」があります。同じ土地でも店によって全く味が違うくらい色々な「そば」があります。その「そば」の評価を、ある方が個人的に書いた本のコピーを貰う機会があり



ました。その評価のランクがユニークだったのでご紹介します。それは、A「毎日でも行きたい!!」、B「しょっちゅう行きたい!」、C「いつ行っても安心できる」、D「もうたぶん行かない…!」、E「二度といくもんかい!!怒りと悲しみの……」というものでした。 微妙な「そば」の味の評価でもランクの種類としてはそのくらいなのかなという印象でした。また、おもしろい話としては、キャッチフレーズが「隠れた蕎麦屋」なのですが、現地に行くと結構にぎやかな旗が近くの道から立っている店もあるそうです。もし山形県に行かれる機会があれば是非召し上がってみて下さい。そのときの評価は如何でしょうか。

教育・研究の評価あるいは外部への説明は全然 違う世界であり、このように単純ではないので しょうが、今後も外部に対して、大学の行ってい ることを説明し、各種の評価を受けざるを得ない 時代になっています。このような時代であること を充分認識し、職員の皆様が出来るだけ効率的に 仕事が出来るよう努力したいと思っております。 今後ともよろしくお願い致します。

総務部長

渥 美 守

初めまして。この四月から総務部長を務めさせ て頂いております渥美と申します。前任地は米子 市で鳥取大学医学部事務部に勤務しておりました。 三月三十一日、私にとって米子の最後の日ですが、 病院の正面玄関から、晴れた空と雪化粧をした中 国地方の最高峰である大山を仰ぎ見ることができ ました。何処の地でも去るときは物悲しく思うと ともに次の任地への期待と不安を抱くものですが、 今回は新任地が創設から二十年間勤務した浜松医 大であり、街も大学内の建物配置も知っていると いうことで見知らぬ土地に対する期待感は残念な がらありませんでした。浜松医大を留守にした十 二年間の空白と単身生活に終止符を打ち家庭に入 るという不安感(一ヶ月に一度のお客様扱いから 毎日帰ってくる亭主扱いへの) は残念ながら打ち 消すことができませんでした。ともあれ不安感の



みからのスタートになりましたがバスから鉄道、またバスへと乗り継ぐ通勤にも慣れ、職場の若手の方達の顔と名前も覚え、十二年間の空白をできれば三倍速くらいのスピードで埋めるようにと努めております。大学周辺の景色は土地区画整理事業で様変わりしましたが、学内は樹木が育ち緑が濃くなり、落ち着いた雰囲気になったと感じております。昭和四十九年六月七日に布橋の県立女子短大の一部を借りて仮校舎としてスタートした浜松医科大学の草創期を経験した年寄りではありますが、本学の発展のために何かお役に立てればと願っております。よろしくお願いします。



※昭和50年代初期の管理棟

総務部会計課長 生態道憲

この度、4月1日付けで会計課長としてお世話になることとなりました生態です。

浜松医大には昭和50年4月に採用されてから平成11年3月まで勤務させていただきました。今回、縁あって7年ぶりに勤務させていただくこととなりましたが、この7年間に3機関を経験させていただき、3機関全てにおいて初物を体験させていだきました。まず、①静岡大学に出向させていただいたときには初めての新幹線通勤(浜松・静岡間)、その後、②群馬工業高等専門学校での勤務では初めての単身赴任、前任地の石川県能美市(大リーグのヤンキース松井秀喜の故郷)にあります③北陸先端科学技術大学院大学におきましては初めての雪掻きを体験し、私のこれまでの人生の中で大変印象に残るものであります。

さて、国立大学も平成16年度から法人化され、会計業務においては初めての企業会計に取り組んでアッという間の2年が経過してしまい、現在3年目に突入しています。まだまだ会計業務も発展途上である中、合理化、効率化に向けた業務改善は当然のことながら、新たな会計処理制度の導入



等やらなければならない業務が目白押しであります。そのような中で会計課職員全員が四苦八苦しながら業務を遂行しているのが現状であります。 しかしながらそれをやり遂げさらに発展させていき、国立大学法人を形成していくのが我々の使命であります。

そういう状況の中、更なる業務改善、会計課職員の意識改革に努めてまいりたいと考えております。また、今後は非常に厳しい財政事情の中、中期目標、中期計画に基づいた大学運営、病院再開発に伴い様々な面での資金計画が必要とされる時期となってきています。教職員皆様のお力添えなくしては進まないものばかりであります。是非とも今以上の皆様のご協力、ご支援をいただけますようお願いするとともに、私自身、精一杯頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。



病院再整備予定図

学務部学務課長 大 野 昭 彦

本年4月1日付けで学務部学務課長に採用されました大野です。どうぞよろしくお願いします。

前任機関は名古屋大学で、学務部学生総合支援 課長として勤務しておりました。名古屋大学を辞 職し、本学に採用(少し不安でした。)ということ で、法人化になっていることをとても感じました。

名古屋大学学務部学生総合支援課では奨学金、 授業料免除等、就職、福利厚生、学生相談等の仕 事をし、文字通り総合でした。(長い課名でした。)

本学ではその学生支援関係に教務関係と留学生 関係の仕事が加わり、さらに7月からは国際交流 の仕事が一元化され、入試に関すること以外の学 生に関することが学務課の仕事となり範囲がより 一層広くなりました。

今までの経験としましては、学生課長、留学生 課長として仕事をしてまいりましたが、初めて教 務関係の仕事を4月から経験させて頂いておりま す。ここで、しっかり仕事をすることで学務に関 する大半のことを経験することができ、さらに大 きく躍進していきたいと思っています。

さて、本学に来て4ヶ月が過ぎ感じたことを2, 3挙げてみますと。

1、会議が多いことです。一日に2つ、3つと



重なることもあります。しかも開催時間が午 後4時過ぎからの会議が多いことです。

- 2、課員が遅くまで一生懸命に仕事をしている ことです。午後7時、8時…と遅くまで。
- 3、学生のサービスについてです。学生はコンビニ感覚で、いつ来ても誰かが対応してくれる。そんな感じを持っている(?)ことです。 学生サービスとしては良いことなのでしょうが、勤務時間としてはどうかと考えさせられます。

最後に、法人化後3年目を迎え中期目標・中期計画、認証評価などなど課題が山積してしております。個々の力には限度がありますが、全員一体となって取り組んで1+1=2 (当然ですが。) 3、4、…にしていきたいものです。現状のルーチンの仕事をしっかりしながら、対応していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。



国際交流セミナー

颁外医学。医照即册

ペンシルバニアでの研究生活

麻酔・蘇生学講座助手 **小 林 俊 司**

私は2004年7月から2年間、アメリカ合衆国のペンシルバニア州フィラデルフィアにある、ペンシルバニア 大学 医学 部・麻酔学 教室 (Department of Anesthesiology and Critical Care, University of Pennsylvania School of Medicine)、David M. Eckmann博士の研究室に勤務させていただきました。

(Eckmann 博士については、下記ホームページをご参照下さい。)

http://www.uphs.upenn.edu/dripps/research/eckmann.html

http://www.uphs.upenn.edu/dripps/faculty/index.html

フィラデルフィアはアメリカ合衆国が、独立宣言を行った街として有名で、その象徴でもある Liberty Bellには、アメリカ全土から観光客がやって来ます。人口150万人、全米第5の大都市なのですが、その一方で郊外には、雄大な自然が残されております。私の滞在したアパート内にも大木が林立し、リスや鹿、アライグマ、スカンクなど様々な動物を見ることができました。私は当初、妻と2人の子供を連れて渡米したのですが、滞在中には3人目の子供を得ることとなりました。そんな私の家族にとっても最高の環境で、大都市近郊にこのような住環境の存在することが、とても羨ましく思われました。

浜松医科大学麻酔・蘇生学講座とEckmannラボとの人的交流は、1999年頃より同講座の佐藤教授とEckmann博士が中心となり、始められました。麻酔の研究部門には、20数名のPrincipal Investigator (PI;研究統括者)がおり、それぞれのラボを構えていますが、その多くは数名単位の小規模なものです。Eckmannラボも、博士課程の院生まで含めて、10名程度のメンバーでした。Eckmann博士は経験豊富な臨床麻酔科医でもありますが、ガス塞

栓症やマイクロバブル(微小気泡)に関する研究では世界的に有名です。その研究の多くは、生体工学、化学、流体力学などの研究室と共同で行われており、メンバーもほとんどが工学部のポスドクや院生で、医師は私だけでした。私も今まで、臨床医として働きながら研究活動を続けて来ましたので、同じ臨床麻酔科医であるEckmann博士がどのように仕事をし、成果を上げておられるのか、大変興味がありました。

麻酔の研究部門では、部門トップの Eckenhoff 教授が吸入麻酔薬の Molecular pharmacology を テーマにしていることが象徴するように、他の分 野同様、分子生物学的アプローチを主体とした研 究が盛んです。一方Eckmannラボでは、マイクロ バブルの挙動を工学的観点と、医学的観点から研 究してきました。医学的アプローチとしては、小 動物や摘出標本を用いたクラシカルな実験系を主 としていたのですが、いよいよ単一細胞レベルで の研究が必要になり、私のプロジェクトからはマ イクロバブルが、血管内皮細胞に及ぼす影響を調 べることとなりました。そのため私は半年ほど、 同大学内・生体工学の Diamond ラボに出向し、 Diamond博士、Eckmann博士と議論しつつ基礎実 験を重ね、その後麻酔学教室に戻ってプロジェク トに取り組みました。研究の過程では、幾つかの おもしろい結果に遭遇することができました。

Eckmann博士の予算の使い方は実にメリハリが 利いており、古い機材もよくメンテナンスして使 い込んでいますし、必要とあらば高価な機材も惜 しみなく導入します。「我々にとって一番大切なの は、時間である。」というのが、彼の持論でした。 各PIは独自に予算を獲得していますから、コスト と研究成果に関しては、自らシビアにならざるを 得ないのでしょう。予算が尽きて閉鎖に追い込ま れたラボも、幾つかありました。また取れた予算 の額に応じて、臨床業務の割合が決まるらしく、 予算が少ない医師はより多くの時間を麻酔業務で こなすということでした。そのような事情もあり、 どのPIも必死で研究日は勿論のこと、臨床日でも ちょっとした空き時間に研究棟へやってきては、 仕事に追われていました。一般的に言って、大多 数のアメリカ人は平均的な日本人より働かない印

象でしたが、少数の精鋭集団が、日本人よりはる かに勤勉なのには驚かされました。

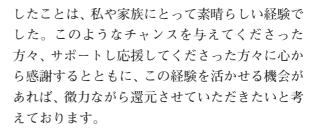
アメリカでの研究生活は、決して楽ではありませんでしたが、これまで臨床麻酔科医として走り続けてきた私に、しばし立ち止まって、様々なことを思索するチャンスを与えてくれました。研究活動以外にも、文化・言語の全く異なる地で暮ら



麻酔科研究部門のポスドク、テクニシャン達。これで全部ではないですが、アジア系が多いです。日本人は私だけですが。



ペンシルバニア大学時代、野口英世が働いて いたとされる建物、Logan Hall。





ペンシルバニア大学キャンパス。雷の実験で有名な Benjamin Franklin ですが、ペンシルバニア大学の設立にも寄与しました。ペンシルバニアンにとっては英雄的存在です。



フィラデルフィア郊外には、古い時代の技術 しか生活に用いない、Amishの人達の村があ ります。何度か BBQ パーティにおじゃまし ました。



大学の中央図書館は巨大です。5階の半分だけでもこれ程の長さが。ここには日本語の本も無数にあり、留学中は随分お世話になりました。



アパート内の様子。何本もの 大木があり、小動物がたくさ ん住んでいます。



(左から) Eckmann 先生、医学生の Steven君、私です。Stevenは数ヶ月間、 私の実験を手伝ってくれました。その プロジェクトが終了したので、皆でラ ンチを食べに行った時の写真です。

中国医科大学:瀋陽での中医学実習

医学科6年 松 浦 みどり

平成18年3月27日から4月7日までの2週間、 浜松医科大学と姉妹校協定を締結している中国医 科大学(遼寧省瀋陽市)の中医科で臨床実習させ ていただきましたので、実習内容を報告します。

まず、中国では、西洋医学と中医学では大学から別になります。中医の医師として漢方(中国では中薬といいます)や鍼灸、按摩などを施行したい人は中医学院に進学します。中国医科大学は西洋医学の大学になりますので、中国医科大学付属病院の中医科で働いておられる先生方は他の中医学院を卒業されています。瀋陽には遼寧中医学院がありますので、遼寧中医学院を卒業された先生方が多かったです。

漢方の処方に興味がありましたので、基本的には毎日董助教授の外来を見学させていただきました。日本の多くの大学病院のように外来は当番制にはなっておらず、病棟と外来を分けているので、外来担当の先生方は毎日外来を担当し、病棟には担当患者さんをもってはいません。患者さんはいつきても同じ先生に診てもらう事ができます。

中医科での診察はまず脈診から始まります。脈 診はしばらくの間脈を触れる必要がありますから、 脈を触れながら問診、舌診を行い、証立てします。 「証」に応じて薬を処方します。脈診から患者さん の状態を診るのは修練を要する技術であるので、 私は全ての患者さんの脈診をとらせていただきま したが、マスターできるレベルには至りませんで した。薬剤処方はおおよその薬剤配合をもとに、 患者さんごとにまさに"さじ加減"をします。外 来で最も多かったのは、何らかの体調不良を訴え る患者さんで、実はストレスに起因するという 方々です。ストレスに処方する薬剤があること、 ストレスだけでも診察にくるという環境に驚きま した。日本ではストレスでは病名がつきませんし、 自分でどうにかするか、市販のサプリメントで対 処するものだと思っておりましたが、中医はあく

まで患者さんの状態を診て、不足しているものを 補う(補剤)、または過剰なものを除去する(瀉剤) 治療なので、病院にいくほどでもない体調不良に も効果が出ます。

日本ではきちんと漢方を勉強するシステムはありませんので、漢方を処方される医師は独学で勉強するしかありません。しかし、中国では中医学専門の大学で5年間勉強して日々多くの患者さんの脈診、舌診などの経験を積んで処方することを考えると片手間でできるようになることではないと思います。また、日本では処方できない生薬も多い上、中国のように先生が生薬を調合するのではなく、調合済みのものが商品となってしまっているので、医師のさじ加減ができず、漢方の弁証施治(患者さんごとに証立てして処方する、つまりオーダーメイド治療)の良さがないのは残念です。

最後になりましたが、中国医科大学での臨床実 習を実現する事ができたのは、市山理事、森教授 (精神神経医学)、中村教授、学務課の方々、菅谷 さん(総務課)、他多くの方々のお力添えによりま す。どうもありがとうございました。



中医科外来にて脈診中



中国医科大学精神科の医師,看護師,学生さん と共に(右から3人目が筆者)

Bialystok 大学での実習について

医学科6年

大 場 裕 子

私は、ポーランドのビァウィストクBialystok医科大学(学術協定校)にて、腎臓科および循環器内科の臨床実習をさせてもらいました。時期は、選択ポリクリ期間中の2006年4月3日(月)から21日(金)までの3週間弱になります。

ビァウィストクはポーランド東部最大の都市で、 ワルシャワから電車で3時間ほどのところにあり ます。「緑の街」と呼ばれるくらい公園が多く、高 層ビルなどはあまりない過ごしやすい街です。た だ、4月は気候が不安定な時期らしく、私が訪れた 頃はまだ池が凍っているほど寒く、緑もまだ芽吹 く前でした。雨が多く雪が降った日もありました。

大学は、駅から少し離れた街の中心部付近にあります。大学の建物は旧Branickich宮殿をそのまま使用しているのでとても豪華です(写真参照)。

私は主に腎臓科で実習させてもらいました。腎 臓科には、15人ほどの医師が勤務しており、医師 は血液透析・腹膜透析・一般内科のチームに分か れていました。半数以上が女性医師であることに、 最初驚きました。実習は、毎朝9時から行われる ミーティングに間に合うように行きます。ミー ティングの後には教授回診があり、会話はポーラ ンド語なので近くにいる先生が簡単に通訳してく れます。教授回診の後は病院や透析に関する説明、 手技の見学などをします。簡単な診察や英語の話 せる患者さんとお話もさせてもらいました。実習 2週目には「イースター」がありました(学生は 一週間休みになるような大きな祝日)。イースター は家族と共に過ごすものだそうで、それまで調子 の悪かった患者さんも『元気になった。調子がよ くなった。』といってほとんどの方が一時帰宅さ れ、空きベットばかりになりました。ドクターも 冗談で『みんな今週は元気になるんだよ、イース ターだからね』と言っていました。

また、循環器科にも2日間だけ実習させてもらいました。循環器科は街中のメインホスピタルに

あり、1日目は造影や心臓カテーテルを、2日目には心臓エコーを見学させてもらいました。もう1日くれば手術も見せてあげるよ、と言われたのですが時間がなく行けませんでした。循環器科は英語を話せる医師が多く、マンツーマンで色々と教えてくださるので、今後行かれる方は循環器科も選択すると良いと思います。

最後に…海外での実習は言葉の壁が大きく、特に英語力の乏しい私は慣れるのに大変でした。それでも、英語の勉強という面も含め今回行かせてもらえたのは私にとって良い経験になったと思います。もし、Bialystok大学での実習に興味がある方がいたら、どうぞ気軽に質問にきてください。



Bialystok大学。旧宮殿を利用した建物で、夜はライトアップされ綺麗でした。図書館が利用できます。



腎臓内科のある建物。平屋建ての決して大きな建物ではありませんが、これ全部腎臓内科(透析室含む)と思えば、そこそこ大きいかも。

大学ニュース

一般ニュース (3月1日~8月31日)

平成17年度

3月15日 医学部の卒業式(学位記授与式)が行われ、188名(医学科116名、看護学科72名)が卒業した。

大学院の学位記授与式が行われ、課程博士26名、課程修士14名、及び論文博士27名に学位記が授与された。

平成18年度

4月5日 医学部の入学式が行われ医学科95名、看護学科60名及び看護学科3年次(編入学)10名が入学した。

大学院の入学式が行われ博士課程36名及び修士課程18名が入学した。

4月6日 新入生オリエンテーション(ガイダンス、健康診断、合宿研修、福祉施設体験 実習等)を実施した。

22日 第 28回 公開講座開講式 (開講日 7/22、7/29、8/5、8/12、8/26) テーマは「続・わかりやすい○○病の話」(参加者 164 名)

8月3日

8月26日 第28回 公開講座閉講式

文部科学省高等教育局国立大学法人支援課課長補佐訪問

6月8日(木)下敷領国立大学法人支援課課長補佐が当大学を訪問し、下記の日程で学内を視察した。

1. 管理棟特別会議室において局長より大学概要 を説明。その後、病院長室にて病院概要、病 院再整備計画について説明。



2. 施設見学(病院内) 説明者:中村病院長、原田病院部長



3. 施設見学 (光量子医学研究センター) 説明者: 寺川センター長



開学記念行事

6月7日(水)に講義実習棟特別講義室において下記の日程で開学記念行事が行われた。

1. 講演会

・21世紀COEプログラム「メディカルフォトニクス」と知的クラスター研究成果発表会 寺川 進副学長



・平成17年度学術研究プロジェクト研究成果発表会



間賀田 泰寛教授(光量子医学研究センター) 「生体機能イメージング法による癌・炎症性疾患を中心とした創薬ターゲットの探索研究」

鈴木 修教授(法医学講座)

「PETとMALDI質量分析を併用した分子イメージングによる各種疾患病態解析に関する研究」

・若手研究プロジェクト研究成果発表会

瀬尾 尚宏助手(皮膚科学講座)

「抑制性免疫応答解除による新しいがん免疫治療 法確立のための基礎研究 |

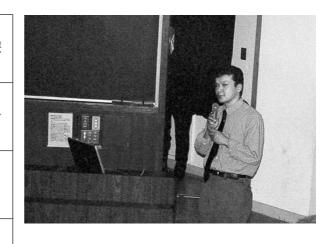
高林 秀次助手(動物実験施設)

「浜松医科大学動物実験施設で見つかった無精子 症マウスの解析 |

佐々木 健技術職員 (解剖学講座)

「Apo Eノックアウトマウスにおけるプラーク 破綻モデルの確立とそのメカニズム解明」

松島 芳隆助教授(総合人間科学講座・化学) 「レーザー光治療への応用を目指した光増感剤の 合成研究」



2. 同窓会学術奨励賞授賞式

梅村同窓会会長から表彰される。



佐原 直日医員 (第三内科)

3. 表彰式

①本学に貢献いただいた方々に対しての表彰・学生課外活動関係藤村 公彦(サッカー部 学外指導者)



・防火関係(平成18年2月3日の本学山林火災における初期消火活動に対して)

山本	健太	(民間人)
藤井	史朗	(医大宿舎入居者)
西川	哲教務員	(動物実験施設)
佐野	晃二専門職員	(医療サービス課)



②名誉教授称号授与式

橋本 久邦 (前薬剤部教授) 寺田 護 (前寄生虫学講座教授)	
---------------------------------	--

※定年退職順

4. 祝賀会

福利棟学生食堂に移動し、祝賀会が行われた。被表彰者を含め、本学教職員、学生が多数集まり開 学記念日を祝った。





学生ニュース (4月1日~8月31日)

平成18年度

4月3日 医学科 5 年次生の臨床実習が始まる。

滋賀医科大学との第31回交流会が、浜松医科大学を当番校として行われた。 5月12日) 滋賀医科大学が15種目中10勝5敗で勝ち、通算対戦成績を浜松医科大学の13 (勝15敗3引き分けとした。また、文化系サークルの管弦楽団も参加し、両校 13 日)

の交流を図った。

6月24日) 第55回東海地区国立大学体育大会において総合成績 男子7位、女子6位 (主管校:名古屋大学、参加校 8大学)

7月9日) *主な成績 空手(男子)優勝

空手(女子)優勝 硬式テニス (男子) 準優勝 準硬式野球部 準優勝

環境整備の一環として構内草刈等を行い、体育系サークル約120名、文化系 7月13日 サークル約30名が参加

7月21日) 富士山8合目に夏季期間中開設される、富士山衛生センターの診療補助者とし て、関 暁人さん (医学科3年) 外6名が従事 8月14日)

7月23日) 第58回西日本医科学生総合体育大会 総合8位 (代表主管校:名古屋市立大学、参加校 44 大学) (

*主な成績 サッカー、空手道 優勝 8月14日)

平成 18 年度 第 31 回浜松医科大学一滋賀医科大学交流会 競技結果

平成18年5月12日(金)~13日(土)

種目		浜	松 滋	賀
硬 式 庭 球	男	0	7 - 2	×
	女	×	0 - 3	0
サッカ	_	0	2 - 1	×
準 硬 式 野	球	0	9 - 4	×
バスケットボール	男	×	33 - 38	0
	女	×	36 - 62	0
バレーボール	男	×	0 - 2	0
	女	×	0 - 2	0
バドミントン	男	0	5 - 0	×
	女	×	1 - 4	0
ボー	ŀ	×		0

種	目		浜	1/s	滋	賀		
/里			供	松		具		
ヨット	470級							
	スナイプ	×			0			
ハン	ドボー	・ル	×	26 -	- 36	0		
剣	道	男	0	7 – 6		×		
大1	但	女						
空	手	道		中	止			
ゴ	ル	フ	×	362 -	- 361	0		
総合結果								
浜	松	5 求	10	滋	賀	i		

※通算(浜松医科大学) 13 勝 15 敗 3 引き分け





サークル紹介

〔女子硬式庭球部〕

こんにちは。女子硬式庭球部です。活動日は前期が月・木・土曜の週3回、後期は木・土曜の週2回で毎回楽しく練習しています。練習は基本的には女子だけで行っていますが、土曜日は男子と合同で行っているため男子部の先輩方からもいろいろアドバイスをしていただいています。

現在部員は21名でそのうち10名が1年生なので、とてもにぎやかで夏の炎天下での練習のときでも暑さを吹き飛ばしてくれます。みんなテニスが大好きで、部活がない日でもテニスコートは自主練をする部員でいっぱいです。そのため他の部の人たちのなかには硬テが毎日部活をやっていると思っている人もいるようです。大学からテニスをはじめた人も多いですが先輩方が丁寧に教えてくれるためどんどんうまくなります。

テニス以外にも花見やバーベキュー、スキー旅 行、飲み会など男子部と合同で行う行事もたくさ んあり、学年関係なくみんな仲よくやっています。

さて、テニスというと個人競技という印象がありますが、団体戦では選手だけが頑張るのではなく応援、ベンチコーチ、審判などみんなが力を合わせることでやっと勝つことができます。負けているときでも、応援してくれている人の笑顔やかけてくれる言葉によって弱気にならずにプレーすることができます。東国体3位という結果も21人全員の力で勝ち取ることができました。団体戦に出ることのできる人数は限られていますが、それぞれがいつかはレギュラーになって試合に出たいと思って練習することでみんなで高め合い強くなっています。

今は西医体、コメディカル大会に向け日々練習に励んでいます。お肌の大敵日焼けにも負けずこれからも頑張ります。



〔卓球同好会〕

私たち卓球部は昨年の4月に立ち上がったばかりの新しい部活で、試行錯誤しながらも、みんなで卓球を楽しんでいます。現在部員は10名、男子も女子も仲が良く、アットホームな雰囲気が自慢です。

十分な練習時間はまだまだ確保できていませんが、誘い合って自主練に出かけることもあり、卓球に対する熱意は誰にも負けません。固定で体育館を使用させていただけるようにもなり、ようやく落ち着いてきた感じです。普段の練習は基礎打ちと課題練習が主となっていますが、ボールも購入したことですし、多球練習も取り入れてレベルアップを図りたいところです。また、男子は団体戦に出場できるだけの人数もそろったことですし、ダブルスの練習も普段から行っていきたいと思います。経験の有無を問わず、部員が増えればもっとさまざまな戦型がそろい、練習にも幅が広がるのではないかと期待しています。

大会への参加もようやく軌道に乗ってきました。 昨年は夏に全国国公立大学卓球大会に、11月には 東海4大学交流戦に、そして今年の3月には東海 医歯薬卓球大会に出場し、東海医歯薬卓球大会では男子団体戦にて決勝リーグ進出という成績をあげることができました。これからも積極的に大会に参加し、いい結果を残せるよう、みんなでがんばっていきたいと思っています。今年はようやく念願の西医体出場がかないましたので、普段の練習の成果を出し切って、しっかりいい試合をしてきます。

卓球は、老若男女だれでも楽しめるすばらしいスポーツです。また、趣味として楽しみたい人から競技として上を目指す人まで、さまざまな取り組み方のできるスポーツとしても、みんなに愛されていると思います。この浜松という場所で卓球を通してさまざまな人と交流していきたいですし、他の大学の選手の方との交流の輪も広げていくことができればとても嬉しいです。多くの人とのかかわりの中で、私たちがプレーヤーとして、そして同時に人間としても成長していくことができれば、立ち上がったばかりのこの卓球部も、すばらしいものに成長していくことと思います。これからも、卓球部の活動を温かく見守ってくださるよう、お願い申し上げます。

文責 部長金村さやか



(ESS)

みなさん、こんにちは。はじめまして、ESSです。ESSは"English Speaking Society"の略です。 「英語を勉強している」「英語がペラペラ」という イメージの方も多いと思います。しかし実際は、 英語をあまり話せない、話せなかった部員がほと んどです。

私たちは2003年4月に、当時の3年生と1年生で本学の留学生と学部学生との国際交流を目的として活動をスタートしました。

日本人学生は留学生たちに日本の文化を紹介するという目的で、浜松城公園でお花見をしたり七夕で浴衣を留学生にドレスアップしたり、という活動をしています。今年2月には飛騨高山と白川郷へスタディーツアーに行ってきました。

一方留学生たちは、民族衣装を着て来てくれたり、各国の料理を腕をふるって作って下さいます。また留学生は大学院生がほとんどなので、自分の研究内容を英語でプレゼンテーションをしてくれることもあり、私たち学生が医学研究に対する興味を持つ良い機会にもなります。

でも、遊んでいるばかりではありません。週2回、昼休みに診療英会話と日常英会話のレッスンを行っています。また、ESS Magazineという全部英語で記事を書いたミニ新聞を2~3ヶ月に一回発行し、メンバー紹介や活動内容報告、おすすめ映画情報や手相占いなどの記事をみんなで分担して掲載しています。

活動範囲は大学内にとどまらず、静岡大学浜松キャンパスのESSと合同でイベントを行ってお互いの大学の学生・留学生とも交流を深めています。2006年になって、静岡県大学生国際交流団体SPIS.U.(Shizuoka Prefectural International Society of Universities)を設立し、その中心団体として浜松医大ESS は大きな役割を果たしています。

外国人たちと交流し彼らと親しくなると、もっと彼らのことを知りたいと思うようになります。その時、「英語がもっと話せたら良いなぁ」と思います。そういった、"出会い"をきっかけとして英語に対する意識が高まってくれれば、そういう気持ちで活動を続けています。年齢・国籍、問いません。誰でも入部できます。気軽に近くのESS部員、留学生に声をかけてみて下さい。



新入生歓迎パーティー



静岡大学 ESS との交流会



節分

○ ○ 留学生紹介



私は中国のハルビン医科大学を卒業して日本に 留学した王麗欣と申します。日本に来てからもう 一年半経ちました。ある中国のことわざで人間は 地球上の神様でどこに行くのも可能だ、それは、 人がどこにいるのかは予想以上と言うことです。 だから故郷は中国の黒龍江省で、勤めていたとこ ろは浙江省で、今私は日本の浜松で勉強をしてい ます。

二〇〇四年十月、小出先生のお蔭で日本に留学 できまして、本当に感謝の気持ちを持っておりま す。日本に来てから、教室と学校の先生方のお世 話でいろいろ教えていただいて、だんだん研究の 方も進歩を遂げて来ました。日本に来る前にもう ずっと日本に憧れていました。日本はアジア一番 で世界でも先進な国として経済も文化もけっこう 発展してきましたので、国全員豊かな生活をして いて、あれは夢見たいで中国とは交流も多くなっ て来て、是非見て行きたいと思いました。大学卒 業してから三年半勤めていましたが、自分の専門 のレベルも高めたいと思って、それに自分の経験 も広げたいと思いました。大学でよく把握した日 本語を生かして、日本にやって来ました。最初来 た時、何も分からなくて、日本人の親切さよく感 じました。バスの係員とかスーパーの店員とか銀 行の職員とか学校の先生方も言うまでもなく皆親 切で丁寧に接してくれて深く感心しました、さす が発展した日本ですね。来たばかりの恐ろしさが 消えてきました。日本では結構便利な生活を過ご していて、自分も研究の方集中できています。

今年四月から博士コース二年生になりました。 研究も広がっていて是非論文を発表しようと努力 しています。

私はハルビン医科大学出身で、ハルビン医科大学は八十年の歴史を持っていて、レベルも高くて、特に心臓の移植の方は生存年数が世界一番の患者

さんを持っています。私の専門は臨床医学日本語系という専門で、第一外国語は日本語に変わって、日本の先端的な医療技術との交流を目指す専門でした。医大の先生方に教わって医学の知識を身に付けて医者の夢を実現しようと思いましたが、卒業した途端基礎研究に変わりました。現在世界では、たくさんの人々は病気に苦しんでいて臨床医学の方はまだ治らない病気の種類は少なくないです。だから病気にかからないことも大切です。ワクチンは人間が病気に掛かることを防ぐためのものです。今の教室の研究方向は未来性高いと思って、全員精一杯頑張っていますが、私も先生方の後ろに追い掛けています。

私の出身地は中国の一番北の所として、黒龍江省と言う所です。一年の中に半年位は冬で、何の緑色の植物も見えなくて真っ白の世界です。だから緑いっぱいの所にずっと憧れていました。大学卒業してから南の方の浙江省と言う所に決めました。浙江省は上海の側で中国の経済の凄く発展したところで気候も浜松と似て、生活の習慣も同じところが多くて、人々は豊かな生活をしています。

おととしの九月の末に日本に参りました私が、 日本は綺麗な国で、国際交流会館の周りの普通の 日本人の庭にも一年中ずっとさまざまな花が咲い ていて、見たら気持ちいいです。こんな綺麗な環 境で優しい人間関係で四年の博士コースを過ごす のを楽しんでいます。



JAPAN: A KENYAN PERSPECTIVE

Francis Wamakima Muregi

Hi. My name is Francis Wamakima Muregi. I am a Kenyan. I came to Japan in October of 2004 as a Research student in Hamamatsu University School of Medicine (HUSM), under the sponsorship of Government of Japan through the Ministry of Education. Currently I am in the second year of my PhD program in the Parasitology Department of HUSM, and my study is geared towards malaria chemotherapy, especially in search of novel antimalarials from natural products. Back in Kenya, I am based at Kenya Medical Research Institute (KEMRI), one of the leading research institutes in human health in sub-Saharan Africa. My institute's research activities are consolidated into 4 main areas namely; Infectious diseases (HIV/AIDS); Parasitic diseases (Malaria); Epidemiology, public health and health system research (incidences and prevalence of diseases); Biotechnology and non-communicable diseases.

Kenya is an eastern African country, which serves as a gateway to the other east African countries. It is a country of about 34 million people, from 42 different ethnic groups. Although the groups have different languages and cultures, we are unified by one language, Swahili, which serves as our national language. It is also the language widely spoken in the larger east African region. Kenya is the home of Safari, Swahili word for journey or expedition. Kenya is famous for wildlife, especially the great predators such as lion and has breath-taking landscapes. Every year, thousands of tourists visit Kenya for wildlife, cultural, beach and scenic safaris. The capital of Kenya is Nairobi, a city of about 2.8 million people. The temperatures of Nairobi are tolerable throughout the year, ranging from 12 to 28°C.

During my stay in Japan, my interaction with the

Japanese people either in the University or in the ordinary day-to-day life has been one great learning experience, a real eye-opener and admittedly, has altered my previously misplaced perceptions about the Japanese society and culture. I have a great admiration for the Japanese virtues, diligence and discipline, which explains not only why such a 'small' country is the second greatest economy in the world but also one of the safest and the cleanest to live in. I also pride in my city, Hamamatsu, since it is one whole package that combines both City/Countryside ambience at the same time. While it is in no way wanting in the privileges of a city, it affords enough space to relax and breath fresh air since unlike most other Japanese cities, it is not crowded. Its proximity to other cities also allows great ease and convenience in traveling to any other parts of Japan.

The values, the memories and the impressions I have of this great Country will forever linger. God bless Nippon.

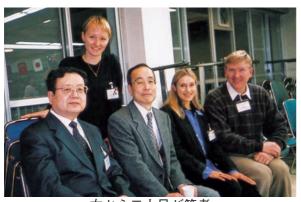


浜松での体験 2005/06

ドイツ・フライブルク大学・医学部学生 アーニマ・イーヴィシュッツ(Anima lwischütz)

「え? Hama ... なんです?」 私は「はままつ」という地名を正確に聞きとれなくて、口を半分開けたような顔でズートア教授 (Prof. Dr. Sutor) にたずねていた。教授は、遠く離れた日本の、ある大学のファンということだったので、その大学がどこにあるのか聞いたときのことだった。

先生は自分の机の向かいの (A3のポスターが何枚か貼ってある)壁を指さしたが、そこには日本のすばらしい寺院建築、桜の花にいろどられた庭園などの印象深い写真の中心に、浜松のコンサートホールが写っていた。そのホールで先生は、日本の友人たちと一緒に演奏会に参加したことがあるそうだ。ズートア先生は、ヤマハとカワイの素晴らしい音響設備についてよく話してくれたけれど、日本における、それはそれは想像を絶するおもてなし、忘れることのできない思い出、そしてきわめて貴重な体験についても同様であった。



右から二人目が筆者

しかしまた同時に、このフライブルク大学と浜 松医科大学との交流制度が、(その時までは)「医 師」が対象であり、いくら「ものおじしない」と はいえ、学生の交流についてはまだ考慮されてい ないという事実についても話してくれていた。

ところがその時から5年たってみると、両大学 は学生の交換交流協定を結んでいた。そしてフラ イブルクのアルベルト・ルートヴィヒ大学で医学 を専攻し、日本が大好きな女子学生(つまり私)は (浜松医科大学の佐藤清昭先生と e-mail のやりとりをし、そして先生の細かい助言に見守られながら) 出発の準備をしていたのである。

今回は私にとって2度目の日本訪問で、半年の間、日本は私の「ふるさと」となることになっていた。そして……、本来の生活が始まるずっと前、つまり名古屋セントレア空港に到着してすぐに、私は自分を歓迎してくれる国である日本の基本的パラメーターを知らされることになる。

正確さと細心さ

飛行機を降りて、時差ぼけに少々まいりながら、 そしてリュックサックを背負い、スーツケースを 引っ張りながら、まずは自分の群集心理にした がって皆と同じ行動をした。つまりは税関の検査 で、日本の人たちと一緒に長い列の後ろについた のである。すると、そこではなく、列の長さがぜ んぜん違う「外国人専用」のところに並べばいい んだと、親切に言ってくれる人がいた。ところが、 「これなら、チェックアウトはすぐに終わるな」と いう私の期待は、親切ではあるけれども断固とし た態度の女性税関吏によって打ち砕かれてしまっ た。

彼女は、(少なくとも5回はあやまりながら、そ して同様の回数のお辞儀をしながら) 私のスーツ ケースの中身を全部、検査すると主張するのであ る。私はその時、どこにスーツケースの鍵を詰め 込んだのか、まったく忘れてしまっていて、鍵を グズグズ探していたから、私の後ろにはすぐに長 い列ができてしまった。そしてそのために、窓口 がもうひとつ開けられる始末だった。しかし女性 税関吏の義務遂行の喜びは、そんなことには一向 に影響されなかった。鍵が見つかると、彼女は慎 重に、そして熱心に自分の仕事を遂行していった のである。最後の最後の冬用タイツまで取り出し、 手投げ弾が入っていない事実を確認すると、もう 一度すべてを順番通りにスーツケースへ入れ直そ うとする。しかしそれは残念ながらうまく行かな かった。3人の同僚が急いで呼ばれてきて、いろ いろやってみたが、やはり駄目だ。そこで私は、自 分のあまり軽いとは言えない体重をスーツケース

の上に乗せ、チャックを閉めにかかった。彼らは この突然の、そして思いもよらない当事者の行動 にちょっとの間ポカンとしていたが、いずれにせ よ、やっとスーツケースは閉まったのである。

さて私は少々疲れたけれども、しかし幸せに顔 を輝かせながら、出口へと向かって行った。

親切

ところが、到着ロビーでは次の「つわもの」が 待っていた。私はまだ携帯電話を持っていなかっ たので、しかしながら浜松医大の女子学生に私の 到着を知らせなければならなかったので(彼女は親 切にも、途中のバス停まで迎えに来てくれることになって いた一訳者注:この学生は、前年にフライブルク大学で 臨床実習をおこなった高津妙子さん)、果敢にテレフォ ンカードの自動販売機へと向かった。最初はうま く行かなかったが、2回目には「ハロー・キティ」 のカードを手に入れ、国内用の公衆電話を見つけ ることもできた。しかし電話は通じない。自分の IQを疑わざるを得なかった。

ひとまわりぐるっと見渡した後に、荷物を手押 し車ごとその場に置いたまま、ホールの真ん中に あった「インフォメーション」という看板を目指 して歩いて行った(ちなみにドイツで「荷物を置き放し にしておく」なんていうことは、とても考えられないこと である)。この看板は日本では、いつも「助け」を 意味している。清潔な感じの制服を身につけた若 い女性がやさしくほほ笑みかけてくれた…、ほほ 笑みかけてくれたけど…私の言葉に反応しない…、 ああ、そうだ、私はドイツ語で話していたんだ。私 がもう一度、英語で話し始めると、うなずいてく れ、テレフォンカードを調べ、そしてしっかりと 期待を持たせる「Please wait here | が告げられる。 彼女はレジに鍵をかけ、インフォメーションの ボックスを一周し、私のコミュニケーションを破 滅させた元凶(つまりテレフォンカード)に少しずつ 立ち向かって行った。いろいろと手をつくしてく れた結果、やっと電話はつながった。

私を迎えに来てくれる打ち合わせはこれですみ、 これによって、正しい時間に正しい場所に到着する という、私の日本滞在の基盤は作られたのである。

融合の意志と思いやりの深さ

浜松医科大学に到着した。大学は、のんびりとした稲田の連なりを要塞のように見おろしながら、そびえ立っていた。私はすぐに、心のこもった歓迎のあいさつを受け、いろいろな説明を聞いた(ESSの皆さんにこの場を借りて心から感謝したい)。病院を案内してもらい、(その後、私にとって欠くことのできないものとなった)「主婦の店 新鮮館」を教えてもらい、コミュニケーション上の助け(つまり携帯電話)と移動手段としての自転車、それからドイツの電気製品が日本でも使えるように電圧変換機を借り、または購入し、市役所での外国人登録をすませ、そして晩には市山先生がお寿司で歓待してくださった。

日本では、自分の置かれている地位を把握し、 上下関係をこころえていることがとても重要なので、私には(賢明にも)、慎重に作られた今後の実 習分野のフローチャート(いわば who is who)が渡 された。私はこれをその後、浜松で暮らしていく にあたり社会生活上の失敗をしないようにと、一 生懸命覚えたのである。

出動領域

私は浜松医大では、3ヶ月にわたり外科学で臨床実習をすることになっていた。まず第二外科学教室に配属される。第二外科学教室は、温かく迎えてくださったし、私はその後一日の内のかなりの時間をそこで過ごすことになったので、第二外科の医局はすぐに私の「別宅」となってしまった。

まずは今野教授がいつも私を励ましてくださったことにお礼を申し上げたい。先生は私を心温かく迎えてくださり、いろいろな点を大目に見てくださった(大学院生と研究生用の「日本語授業」に参加することを許可してくださったのも、そのひとつである)。そして第二外科の一人ひとりの先生方は、私の日本語とドイツ語と英語が混じった「迷路」のような質問に答えながら、私を外科学の世界へと招き入れ、付き添ってくださり、そして指導してくださった。

朝のカンファレンスの症例報告はいつも、辛抱 強く、そして正確に英語に訳されたので、私は手 術の基本構造を理解したり、手術の方針の決定を 追体験することができた。いくつかの研究会で提 示される高度な問題も、私を指導してくれた先生 方はいつも、自分のことは後回しにしながらも、私 に説明し、分からせようとしてくださった (特に、 坂口、倉地、そして宇野の各先生には感謝申し上げたい)。

手術に実際に立ち会うことは、ドイツの手術状況に合わせてコンディションを整えてきた臨床女子学生(つまり私)にとって、さらに大きな挑戦を意味した。私は、先生方が思いやり深く与えてくれた階段を、上ったり下がったりしながら、少しずつよじ登っていったのである。日本の壊れやすい陶磁器がならんだお店の中に、ドカドカと足を踏み入れていくドイツのマンモスのような不器用さのため、日本人の学生さんたちに対しては目立ち過ぎないように、そして手術中の先生たちには邪魔にならないように心がけた。

はじめにいくつかの困難はあったけれど、私の本来の興味、つまり手術室に関するあらゆることに対する興味は失われることはなかった。私は私のチューターたちに、(おもに手術が終わってから)質問を山ほど浴びせかけたが、彼らはストイックな冷静さをもって、映像やグラフを使い、それに詳しく答えてくれた。この私の姿勢は、「質問しなければ駄目だ。質問しないのは、興味がない証拠だ」という、ドイツの哲学と教授法によるものだけれど、中村先生はこれに対して、英語の、比較的大きな、非常に内容の濃い(外科学の)教科書を貸してくださった。この本はその後、私の予習の際の参考書となったし、私の質問の嵐をしずめるという効果ももたらしてくれた。

日本の病院では、患者の家族は手術で切除された部分を見ながら医師から説明を受けるが、これなどは、血管プロテーゼがいわばホームメイドで作られることなどと並んで、私にとって本当に驚きの事実だった。ドイツでは患者の家族は、手術の結果を電話で伝えられるに過ぎないか、あるいはそもそも、手術が終わった後に詳しい説明を受けるなんていうことはないのである。

手術チームによっては、日本人の学生と私は、 手術領域から3メートルほど離れているように指 示されることがあった。でもこれは場合によってはとても興味ある体験となった。一人ひとりが別々に時間を過ごすのではなく、日本人の学生たちは皆で一緒にカルテを勉強したり、私に今行われている手術の状況や技術について教えてくれた。彼らは、私の解剖学の知識がそんなに十分でないことを知ると、時々は図解して説明してくれた。そして私が学生たちと一緒に勉強する機会に恵まれないときは、その時その時の麻酔の先生が私のところへ来て説明するという配慮があり、私は手術の全体的な枠組みに参加できたのである。

午後の授業は、わずかな例外をのぞけば、私の ために英語で行われたのだけれども、これは腹部 外科学、および血管外科学についてのすばらしい 理論的基礎知識を与えてくれた。この授業に参加 できたことは、私にとって大きな喜びとなった。 教授回診、そして晩の回診もまた同様で、私は患 者さんの病状、そしてその回復状況を知ることが できた。

もっとも、白状しなければならないことだけれ ど、最初のうちは他の皆さんと調和するのに困難 も感じていた。マスクをつけなければならなかっ たのでいつも酸素不足におちいっていたし、多く の先生たち、看護婦さんたち、そして不安な気持 ちで立っている学生さんたちの中に混じって、私 は、つまずいて患者さんのベッドに転げ込んでし まうのではないかとか、ベッドを仕切っている カーテンにくるまってしまい出られなくなるん じゃないか、警報ボタンを間違えて押しちゃうん じゃないか、あるいは私の(ヨーロッパ人特有の) とても大きな歩幅ゆえに、気をつけないと小柄な 看護婦さんたちを踏んづけちゃうのではないか、 などと心配していた。

しかし徐々に落ち着きを取りもどしてきたし、また一緒に実習をした学生さんたち、指導してくれた先生方、看護婦さんたちの辛抱強い助けのおかげで、私ははじめのころの困難を克服していくことができた。そしてちょうどそのころ、私の実習は次のステップに進むことになる。第一外科学教室である。その心臓血管外科部門は有名で、私はまず、胸郭を開く非常に印象深い手術のいくつ

かに立ち合わせてもらうことができた。その手術は、その意義と規模、そして結果において、広範囲、かつ魅惑的なものであった。数井教授には温かく、そして好意的に教室に迎えていただいた。私は大動脈アーチ交換 (aortic arch replacement) の技術を理論的に教えていただいただけでなく、実際に応用することまで体験することができた。

続いては、呼吸器外科のお世話になる。ここで は外科学の実践面を学ぶことができた。日本の感 覚から言っても、また伝統的な教育のイメージか ら言っても、外国人留学生が積極的に手術に参加 できるというのはきわめて革新的なことだと思う が、いずれにせよ、私が手術助手をつとめるとい う晴れの時がやってきた。手術テーブルのそばの 自分に示された位置にうやうやしくつく。自分に 寄せられた信頼にうれしくてたまらなくなりなが ら、与えられた課題をできるだけ正確に実行する ことに懸命だった。最初は肺切除の手術手順にま だ慣れていなくて、手術医の手に、Pan 鉗子を (Kocher鉗子の代わりに)渡してしまって (それと も逆だったかしら?)、先生から呆然と見つめられた り、あるいは綿球の代わりに電気焼灼器を渡した りしていた。しかし何度か経験をつんでいくうち に、正しい順序を学び、私の「的中率」も上昇し ていったのである。

もうひとつのハイライトは、胸腔のビデオ撮影であった(ここには鈴木一也先生の辛抱づよい指導があった)。私は、いくつかの肺の部分を広い範囲にわたって形態学的に学ぶ機会にしようとカメラを回した。もちろんこれはこれで興味あることなのだが、それは残念なことにその時手術が行われていた領域からは遠く離れた撮影となってしまっていたのである(失敗!)。

船井先生からは、正確に糸を切る訓練を受けたし("Three millimeters, please")、高持先生は私に、糸を結ぶ高度な技術やCTの解釈を勉強させてくれた。呼吸器外科学のリラックスした、温かい雰囲気の中でまた、毎週開かれる読書会、そして名古屋の愛知がんセンターでの学会に参加することもできた。

私は外科学の実習のあとに、病院の病理部で勉

強することを希望していたが、私の呼吸器外科の 実習指導者のおかげでそれを実現することができ た。というのは、先生は私の手を取って病院病理 部まで連れて行き、私を紹介し、大胆にも「病理 学のとりこになっているドイツ人学生を引き受け てくれないか」と頼んでくれたのである。三浦克 敏先生はたいへん柔軟な心の持ち主で、この私の 願いをこころよく聞きとどけてくれた。素晴らし い修行の日々が始まった。そこで受けた説明は、 とても印象深いものだった。たとえば、すべての 情報を集めてモザイクのように組み立てていき、 総合的な芸術作品(つまり一番可能性の高い診断) に作り上げることなどを勉強した。

さらに高速切開、そして「切り出し」に参加させてもらい、また学生の授業や第二病理学の購読会にも温かく迎えてもらった(筒井先生は、第二病理の研究に積極的に参加するように励ましてくれた)。三浦先生には学会へ連れて行っていただいたり、それとは別に、私がとても高く評価している日本文化の神髄へも案内していただいた(学会に行った際にはハトバスで東京見物ができたし、そのほか、お花見、お城の見学、茶会、ショッピングモールなども印象的だった)。

端的に言うと、私は教育学上、そして教授法上の理想的な形態を享受できた。これはドイツの大学ではもはやありえない形であり、ドイツの医学生はただ夢見ることだけを許されているような形態である。こういう教育学上、そして教授法上の理想的な形はドイツにおいて今、文化政策サイドから、特にPISAの結果の悪さをきっかけに、必死に求められているのである。(訳者注:PISAとは、Program for International Student Assessment の略で、OECDによる15歳児を対象とする学習到達度の評価のこと。それが本来の意図ではないにせよ、結果として各国の子どもたちの能力が比較対照されることとなる。)

その「国際的」ということですが ...

もし浜松医大の学生で、自分の大学とドイツの 大学との交流制度に興味を持った人が、それまで 耳にしたことのないフライブルク(Freiburg)の 名を聞いたら、(ちょうど当時私が「え? Hama ... なん です? | とズートア先生に聞いたように)「え? フライ ... なんです? | と聞くかもしれない。

(人口が20万人で、11世紀の末に基礎が築かれ た) フライブルクがその端に接している 「黒い森 | (訳者注:ドイツ語 "Schwarz"wald、英語 Black Forest) は、 樅の木の森が夏の間「黒い」のでその名があるの だけれど、夏は山歩きをする観光客で、そして冬 はスキー客でにぎわうし、温泉や湖があるので保 養地としても名高い。

ゆっくりと傾斜をなす山すそ、野趣に富んだロ マンチックな谷間、丘の間に絵のように点在する 小さな村々、草原に囲まれた農家、そして隠れた ようにひっそりとたたずむ教会…、このような自 然に囲まれた「黒い森」は、田園地方の伝統、風 俗、そして工芸品(ガラス工芸、焼き物、カッコー時計 のような木工品) のふるさととも言うことができる。 そうそう、「黒い森のサクランボケーキ」も有名だ。



こういう「黒い森」にとって中心的な意味を持 つフライブルクの町は、三方を外国に囲まれてい る。西のフランス、南のスイス、南東のオースト リアである。フライブルクの町には、中世に運河 と防火の目的で作られた水路が縦横に走っており、 町の建物の建築様式は (1600年ころから 1750年ころ までヨーロッパで流行した)バロック様式である。

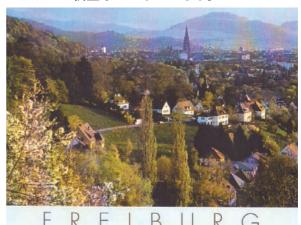
その一方フライブルクは、「ドイツのトスカー ナ | と呼ばれることもあるが、この方が、(せまい 小路や静かに物思いにふけりながら歩くことがで きるアーケード、道ばたのカフェや緑の公園に特 徴づけられた) 町の雰囲気をよりよく表現してい ると思う。そしてこの雰囲気は、(北のドイツ人た ちと比べた時の) フライブルク市民の性格にもあ てはまるのである。フライブルクの人々は、どち らかと言うと明るく、温かで、うち解けた性格。そ してパーティーが好きで、ほろ酔い機嫌なのであ

る。それもそのはず、町のまわりには多くのワイ ン用ブドウ畑があり、ワイン祭りも祝われ、お隣 のフランスのエルザス地方に出かけていって、ワ インの試し飲みなどをしてくることもある。

もっとも日本の人たちは、ドイツ人が大きな声 で話したり、荒っぽく無遠慮に振る舞ったりする と、自分たちの礼儀正しさとか、自らの意志をあ まりはっきりと表明しない態度とか、思いやり、 あるいは思慮分別と比べてみて、少々とまどうこ とだろう。

そういうわけで、ドイツに来た日本人は、デパー トの一階で明るく「いらっしゃいませ」と挨拶さ れることもないし、買った商品をていねいに、芸 術的に、そして少なくとも三重に包んでもらうこ ともない (フライブルクは、いわゆる 「緑の町 | として、 そういう無駄を省く資源保護と環境保護につとめている)。 そして、たくさんのスピーカーやテープレコー ダーを使ったアナウンスにより、あらゆる危険に 繰りかえし繰りかえし注意を喚起されるという安 全性も、ドイツでは保障されていないのである。

フライブルクの昔からの交通手段として、自転 車と並んで、楽しく色づけされた路面電車が走っ ている。それに慣れない旅行者は、レールにつま ずいたり、電車にぶつかりそうになったりしてし まう。それでもその路面電車のお陰で、フライブ ルクの町の中心は自動車が少なくて、しゃれたお 店で買い物をしたり、町を散歩しようとする歩行 者にとってはとても快適な環境が作り出されてい る。歴史的に重要な建物を排気ガスから守るとい う意味でも、この路面電車システムは文化財保護 におおいに役立っているのである。



大

約3万人の学生が住んでいる大学町フライブルクの空には、フライブルク大聖堂がそびえ立っている(西の塔は高さ116メートル。ちなみに、フライブルク大学は1683年から1720年の間にイエズス会のKollegiumー訳者注:語源的に英語のcollege に相当ーとして創立された)。この西暦1200年前後に建てられた大聖堂は、両世界大戦でも破壊されず、何世紀にもわたってフライブルクの地理的、そして精神的な中心となってきた(大聖堂のまわりにはまた、地元の人にも旅行者にも愛されている市場がある)。この塔について、1818年にスイスのバーゼルに生まれた文化歴史学者であるカール・ヤーコプ・ブルクハルト(Carl Jakob Burckhardt)は、「キリスト教徒の有する最も美しい塔である」とほめたたえている。

しかしこのようなバーチャルな町の案内の代わりに、要するに私は、興味をお持ちの方ならどなたでも、そして行こうかどうしようか迷っている人々をもぜひ、この「黒い森」の中心の町であるフライブルクへご招待したいと思う。それが留学の目的にせよ、誰かを訪ねる目的にせよ、旅行のついでにせよ、フライブルクは訪れる価値がいつでもあるのである。私は両大学の架け橋として、皆さんの好奇心を刺激し、受け入れの手助けをし、皆さんを心から歓迎したいと思う、ちょうど、私が浜松に滞在していた時に皆さんにそうしていただいたように……。

最後に、私のこの、言葉では言いつくせないほど貴重な浜松滞在を可能にしてくださったすべての皆さんに(ここにいちいちお名前をあげることのできなかった皆さんにも)心から感謝をしたいと思う。皆

さんは、この、時として変な、時として不器用な、ヨーロッパから来た人間を、比類のないほど温かく見守ってくださった。私のために、常に友好的に、そして注意深く尽力してくださった。おかげさまで、すばらしい、忘れることのできない体験、人生の一時期と学生時代の一時期の体験をすることができた(ここまであげたものの他にたとえば、学務課からの「クリスマスプレゼント」としての日光旅行、佐藤清昭先生と一緒に行った龍譚寺とそのあとで食べたうなぎ、各セクションが催してくださったサヨナラパーティなどなど)。本当に「どうもありがとうございました」(訳者注:この感謝の言葉の原文は日本語)。

フライブルク大学の病理学者であったフランツ・ビューヒナー (Franz Büchner) は次のような言葉を残しているが、私も同じ言葉でこの体験記をしめくくりたいと思う:

「私と妻の二人は多くの外国を旅したが、一番大切 な、そして学問的、および人間的にもっとも豊か なものは、日本への旅であった」。

(Franz Büchner はフライブルク大学の病理学者で、1963年に日本を訪れている。彼はその先生である Ludwig Aschoff とともにその体験記の中で次のように書いている:

「日本と日本人の魅力は、日本人の精神的態度と生き方に深く根ざしており、またその魅力の基本的な性格は、日本人の真面目さと「自然に対する畏敬の念」、そして慎みと思いやりによって形作られている。|)

(原文ドイツ語、訳 佐藤清昭)

平成 18 年度入学者選抜状況

平成18年4月1日現在

:	年 度			平 成	18	年 度		
学科名	区分 [募集人員]	a 志願者	b 受験者	c 欠席者	d 欠席率 (c/a)	e 合格者	f 倍率 (a/e)	g 入学者
	前期日程 [60]	人 432 (132)	人 375 (111)	人 57 (21)	13.2 (15.9)	人 60 (18)	7.2 (7.3)	人 58 (18)
医	後期日程 [10]	232 (89)	156 (56)	76 (33)	32.8 (37.1)	10 (2)	23.2 (44.5)	10 (2)
200	推薦入学 [25]	70 (29)	70 (29)	0 (0)	0.0 (0.0)	25 (7)	2.8 (4.1)	25 (7)
学	帰国子女 [若干名]	19 (9)	17 (8)	2 (1)	10.5 (11.1)	2 (1)	9.5	2 (1)
科	合計 [95]	753 (259)	618 (204)	135 (55)	17.9 (21.2)	97 (28)	7.8 (9.3)	95 (28)
	私費外国人 [若干名]	1 (0)	1 (0)	0 (0)	— (—)	0 (0)	— 	0 (0)
	前期日程 [30]	62 (59)	58 (55)	4 (4)	6.5 (6.8)	30 (28)	2.1 (2.1)	28 (26)
	後期日程 [10]	74 (72)	31 (31)	43 (41)	58.1 (56.9)	* 11 (11)	6.7	10 (10)
看	推薦入学 [20]	49 (46)	49 (46)	0 (0)	0.0 (0.0)	20 (19)	2.5 (2.4)	20 (19)
護学	帰国子女 [若干名]	2 (2)	1 (1)	1 (1)	50.0 (50.0)	1 (1)	2.0 (2.0)	1 (1)
子 	社会人 [若干名]	9 (8)	7 (6)	2 (2)	22.2 (25.0)	1 (1)	9.0	1 (1)
	合計 [60]	196 (187)	146 (139)	50 (48)	25.5 (25.7)	* 63 (60)	3.1 (3.1)	60 (57)
	編入学 [10]	51 (51)	39 (39)	12 (12)	23.5 (23.5)	* 13 (13)	3.9 (3.9)	10 (10)

備考1.()書きは、内数で女子を示す。

2. ※印の合格者には、追加合格者を含む。

平成 18年度入学者選抜に係る高等学校等卒業年別状況

平成18年4月1日現在

_								1 /90 10 1 1	
区分学科	高等学校等 卒業年月	18年3月	17年3月	16年3月	15年以前	大学検定	帰国子女	合計	私費外国人
	士陌李	417(147)	160 (56)	57(13)	94(32)	6(2)	19(9)	753 (259)	1(0)
医	志願者	55.4%	21.2%	7.6%	12.5%	0.8%	2.5%	100.0%	
学科	入学者	50(12)	27(8)	11(4)	5(3)	0(0)	2(1)	95(28)	0(0)
	八子有	52.6%	28.4%	11.6%	5.3%	0.0%	2.1%	100.0%	
	志願者	170(166)	10(6)	4(4)	9(8)	1(1)	2(2)	196(187)	
看護	心願有	86.7%	5.1%	2.0%	4.6%	0.5%	1.0%	100.0%	
学科	入学者	55(53)	2(1)	0(0)	1(1)	1(1)	1(1)	60 (57)	
	八子有	91.7%	3.3%	0.0%	1.7%	1.7%	1.7%	100.0%	
	志願者	587 (313)	170 (62)	61(17)	103 (40)	7(3)	21(11)	949 (446)	1(0)
合	心願有	61.9%	17.9%	6.4%	10.9%	0.7%	2.2%	100.0%	
計	入学者	105 (65)	29(9)	11(4)	6(4)	1(1)	3(2)	155(85)	0(0)
	八子白	67.7%	18.7%	7.1%	3.9%	0.6%	1.9%	100.0%	

備考1.()書きは、内数で女子を示す。

^{2.} 編入学を除く。

平成 18 年度入学者選抜に係る出身高等学校等の所在する都道府県別状況

平成 18 年度入学者選抜 (総計)

部道	学	科	名	<u> </u>		2 科		看	護	学	科		į	<u></u>	
出							者					志原			者
青	北		道	2		- · · · · · ·									
宮 域	青														
宮 域	岩		手	1	(1)			1	(1)	1	(1)				
秋 田 3 (1) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 3 (1) 1 (0) (1) 1	宮		城	8	(3)										
編 局 4 (0) 0 (0) 次 域 18 (10) 1 1 1 (1) 1 (1) 7 (2) 2 (1) 群 場 1 (1) 1 1 1 (1) 1 (1) 7 (2) 2 (1) 群 場 1 (1) 1 1 1 (1) 1 1 (1) 1 1 (1) 0 (0) 頂 玉 9 (4) 2 (1) 千 葉 18 (10) 1 1 1 (1) 1 19 (11) 1 (0) 東京 112 (46) 16 (8) 5 (4) 1 (1) 117 (50) 17 (9) 中京 川 83 (25) 5 (1) 83 (25) 5 (1) 83 (25) 5 (1) 第 周 3 (1) 0 (0) 富 山 2 2 (0) 2 (0) 0 (0) 1	秋				(1)	1						3	(1)		(0)
茨 城 18 (10)					(1)							3	(1)	0	(0)
断 本 6 (1) 1	福.												(0)		(0)
購入 1 (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (1) (2) (2) (2) (2) (2) (3) (1) (0) (0) (2) (2) (2) (3) (1) (0) (0) (2) (2) (3) (1) (0) (0) (0) (1) (2) (1) (3) (3) (1) (2) (1) (3) (3) (1) (4) (3) (3) (1) (4) (2) (2) (1) (4) (2) (2) (1) (4) (2) (2) (3) (3) (3) (3) (3) (3)<														0	
検						1		1	(1)	1	(1)				
東京 112 (46) 16 (8) 5 (4) 1 (1) 117 (50) 17 (9) 神 奈 川 83 (25) 5 (1) 83 (25) 5 (1) 83 (25) 5 (1) 0 (0)	群													0	
東京 112 (46) 16 (8) 5 (4) 1 (1) 117 (50) 17 (9) 神 奈 川 83 (25) 5 (1) 83 (25) 5 (1) 83 (25) 5 (1) 0 (0)	埼					2	(1)								
神 奈 川 83 (25) 5 (1)	土							<u> </u>							
高 山 2	果							5	(4)	<u> </u>	(1)				
高 山 2	仲	二 余		83		5	(1)					83			
山 梨 11 (2) 3				<u>ა</u>	(1)							3			
山 梨 11 (2) 3								1	(1)			2			
山 梨 11 (2) 3	/[]			5 T				<u> </u>	(1)						
長 野 7 (2)					(2)	5		1	(4)	ე	(2)				
岐			野	7						ა ე				<u>0</u>	
静				<u>'</u> 12		3		2		<u>.</u>	(3)			3	
受 知 79 (30) 14 (3) 40 (39) 10 (10) 119 (69) 24 (13) 三 重 6 (4) 2 (2) 1 (1) 8 (6) 1 (1) ※ 質 1							(11)			31	(29)			79	
大 阪 10 (6) 1							- X 	+							
大 阪 10 (6) 1	=			6			\9./	2							
大 阪 10 (6) 1	滋		智		\				\.		\. /				
大 阪 10 (6) 1	京		都	7	(2)										
兵 庫 2	大				(6)	1		1	(1)			11			
州歌山 3 (1) 2 (1) 1 (1) 4 (2) 2 (1) 島 取 2 (1) 1 (1) 2 (2) 1 (1) 4 (3) 2 (2) 島 限	兵			2								2		0	
州歌山 3 (1) 2 (1) 1 (1) 4 (2) 2 (1) 島 取 2 (1) 1 (1) 2 (2) 1 (1) 4 (3) 2 (2) 島 限	奈		良	1											
鳥 取 2 (1) 1 (1) 2 (2) 1 (1) 4 (3) 2 (2) 島 根 1 (1) 1 (1) 1 (1) 0 (0) 岡 山 9 (6) 3 (3) 2 (2) 12 (9) 2 (2) 広 島 5 (1) 1 (1) 1 (1) 0 (0) 山 1 1 (1) 1 (1) 1 (1) 0 (0) 番 川 1 (1) 1 (1) 1 (1) (1) (1) (1) (2) (1) (1) (1) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (2) (3) (3) (2) (2) (2) (3) (3) (2) (2) (3) (3) (2) (2) (2) (3) (3) (2) <t< td=""><td>【相</td><td>歌</td><td></td><td>3</td><td>(1)</td><td>2</td><td></td><td>1</td><td>(1)</td><td></td><td></td><td>4</td><td></td><td>2</td><td></td></t<>	【相	歌		3	(1)	2		1	(1)			4		2	
同 山 9 (6) 3 (3) 2 (2) 12 (9) 2 (2) 広 島 5 (1) 0 (0) (0) 位 日 1 (1) 1 (1) 0 (0) (0) (0) 信 島 4 (1) 0 (0) (0) (0) (0) (0) (0) (0) (0) (0)				2	(1)	1	(1)	2	(2)	1	(1)	4	(3)	2	(2)
広島 5 (1) 5 (1) 0 (0) 山口 口								1	(1)					0	(0)
山口口 1 (1) 1 (1) 0 (0) 徳島4 (1) 4 (1) 0 (0) 香川1 1 1 (1) 2 (1) 0 (0) 愛媛3 (2) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 4 (3) 2 (2) 高知1 (1) 1 (1) 1 (1) 1 (0) 0 (0) 福岡1 (1) 1 (1) 1 (1) 0 (0) 佐賀1 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 長崎 2 (2) 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大分1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 度崎 0 (0) 0 (0) 0 (0) 度陽 7 (0) 0 (0) 0 (0) 沖縄1 1 1 1 (1) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 大学検定6 (2) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 1 (1) 外国2 2 (1) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 3 (0) 1 (0) 昼野学生 1 1 (1) 2 (1) 2 (1) 11 3 (2)				9				3	(3)	2	(2)			2	
徳 島 4 (1) 1 (1) 2 (1) 0 (0) 香 川 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 0 (0) 愛 媛 3 (2) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 4 (3) 2 (2) 高 知 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 福 岡 1 (1) 1 (1) 1 (0) 0 (0) 佐 賀 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 熊 本 2 (2) 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大 分 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 宮 崎 0 (0) 0 (0) 0 (0) 座 児 島 7 7 (0) 0 (0) 沖 縄 1 1 (1) 1 (1) 1 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 (1) 1 (1) 21 (11) 3 (0) 1 (0) 昼野学生 1 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)	広			5	(1)									0	(0)
香川 1 1 (1) 2 (1) 0 (0) 愛媛 3 (2) 1 (1) 1 (1) 4 (3) 2 (2) 高知 1 1 (0) 0 (0) 福 間 1 (1) 1 (1) 1 (1) 0 (0) 佐 賀 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 長 崎 0 (0) 0 (0) 0 (0) 族 本 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大 分 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 宮 崎 0 (0) 0 (0) 0 (0) 廃 児 島 7 7 (0) 0 (0) 0 (0) 沖 縄 1 1 (1) 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 大 学 検 定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 3 (0) 1 (0) 昼胃子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)								1	(1)						
愛媛 3 (2) 1 (1) 1 (1) 1 (1) 4 (3) 2 (2) 高知 1 1 (0) 0 (0) 福間 1 (1) 1 (1) 0 (0) 佐賀 1 1 (0) 0 (0) 長崎 0 (0) 0 (0) 0 (0) 熊本 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大分 1 1 (0) 0 (0) 庭児 6 2 7 (0) 0 (0) 廃児 7 7 (0) 0 (0) 沖縄 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外国 2 1 (1) 1 (1) 21 (11) 3 (0) 1 (0) 帰国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)					(1)										
高知 1 (0) 0 (0) 福間 1 (1) 0 (0) 佐賀 1 1 (0) 0 (0) 長崎 0 0 (0) 0 (0) 熊本 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大分 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 庭児 5 7 (0) 0 (0) 0 (0) 沖縄 1 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 1 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外国 2 1 2 1 1 3 (0) 1 (0) 根国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0) 0 (0)	1000			1	(0)	4					/ . \				
福 間 1 (1) 1 (1) 0 (0) 佐 賀 1 1 (0) 0 (0) 長 崎 0 (0) 0 (0) 熊 本 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大 分 1 1 (0) 0 (0) 0 (0) 宮 崎 0 (0) 0 (0) 0 (0) 鹿 児 島 7 7 (0) 0 (0) 0 (0) 沖 縄 1 1 (1) 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 1 1 3 (0) 1 (0) 帰国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)	変				(2)	1	(1)	<u> </u>	(1)	<u> </u>	(1)				
佐 賀 1 1 (0) 0 (0) 長 崎 0 (0) 0 (0) 熊 本 2 (2) 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大 分 1 1 (0) 0 (0) 宮 崎 0 (0) 0 (0) 鹿 児 島 7 7 (0) 0 (0) 沖 縄 1 1 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 1 (1) 外 国 2 1 1 1 3 (0) 1 (0) 帰 国 子 女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 0 0 0 (0)	.億											H			
長崎 0 (0) 0 (0) 熊本 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大分 1 1 (0) 0 (0) 宮崎 0 (0) 0 (0) 0 (0) 鹿児島 7 7 (0) 0 (0) 0 (0) 沖縄 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 1 1 3 (0) 3 (0) 1 (0) 帰国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)	.1亩. <i>H</i> :				(1)										
熊 本 2 (2) 2 (2) 0 (0) 大 分 1 (0) 0 (0) 宮 崎 0 (0) 0 (0) 鹿 児 島 7 (0) 0 (0) 沖 縄 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 大 全検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 1 1 3 (0) 3 (0) 1 (0) 帰 日 子 1 (1) 2 (1) 2 (1) 2 (2) 私費留学生 1 (0) 0 (0)	[上]			1											
大分 1 1 (0) 0 (0) 宮崎 0 (0) 0 (0) 鹿児島 7 7 (0) 0 (0) 沖縄 1 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 1 1 3 (0) 1 (0) 1 (0) 0 (0) 昼日子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 0 0 0 (0)	能							າ	(9)						
宮 崎 0 (0) 0 (0) 鹿 児島 7 7 (0) 0 (0) 沖 縄 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 1 1 3 (0) 3 (0) 1 (0) 帰国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)	十			1				<u>۔۔۔۔۔۔۔</u>	(4)						
鹿児島 7 沖縄 1 1 1 1 1 2 1 2 1 大学検定 6 (2) 1 1 1 1 7 (3) 1 (1) 外国 2 1 1 3 (0) 1 (0) 帰国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)				1											
沖 縄 1 1 (1) 1 (1) 2 (1) 2 (1) 大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 1 1 3 (0) 1 (0) 帰 国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 0 0 (0)	<u></u> 鹿			7											
大学検定 6 (2) 1 (1) 1 (1) 7 (3) 1 (1) 外 国 2 1 1 3 (0) 1 (0) 帰国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)		<u>/ Ll</u>				1		1	(1)	1	(1)				
外 国 2 1 1 3 (0) 1 (0) 帰 国 子 女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留 2 1 1 (0) 0 (0)	 	学 検			(2)					1					
帰国子女 19 (9) 2 (1) 2 (2) 1 (1) 21 (11) 3 (2) 私費留学生 1 1 (0) 0 (0)	外	!/.		<u>9</u>	\4/				\ .I ./	1	\. I ./			1	
私費留学生 1 1 (0) 0 (0)		国 子			(9)	2	(1)		(2)	1	(1)			3	
				1	\.\/		\.4./	ļ	\ 4)		\. !. /	1			
合 計 754 (259) 95 (28) 196 (187) 60 (57) 950 (446) 155 (85)	合		計	754	(259)	95	(28)	196	(187)	60	(57)	950	(446)	155	(85)

備考1.() 書きは、内数で女子を示す。

^{2.} 編入学を除く。

第 100 回医師国家試験大学別合格状況

順位	大学名	受験者 (人)	合格者 (人)	合格率 (%)
1	防衛医科大学校	47	47	100.0
2	札幌医科大学	101	100	99.01
3	横浜市立大学	60	59	98.33
4	昭和大学	110	108	98.18
5	筑波大学	105	103	98.10
6	順天堂大学	96	94	97.92
7	山形大学	108	105	97.22
8	自治医科大学	99	96	96.97
9	東京慈恵会医科大学	115	111	96.52
10	産業医科大学	102	98	96.08
11	群馬大学	97	93	95.88
12	日本大学	120	114	95.00
13	神戸大学	119	113	94.96
14	京都府立医科大学	98	93	94.90
15	大阪大学	111	105	94.59
16	名古屋大学	107	101	94.39
17	秋田大学	116	109	93.97
18	関西医科大学	112	105	93.75
19	東邦大学	111	104	93.69
20	旭川医科大学	109	102	93.58
21	大阪市立大学	75	70	93.33
22	千葉大学	119	111	93.28
23	聖マリアンナ医科大学	118	110	93.22
24	宮崎大学	116	108	93.10
25	新潟大学	113	105	92.92
26	東京医科歯科大学	69	64	92.75
27	慶應義塾大学	96	89	92.71
28	久留米大学	121	112	92.56
29	富山大学	107	99	92.52
30	岡山大学	105	97	92.38
31	福井大学	113	104	92.04
32	福島県立医科大学	87	80	91.95
33	名古屋市立大学	86	79	91.86
34	滋賀医科大学	98	90	91.84
35	山梨大学	109	100	91.74
36	埼玉医科大学	95	87	91.58
37	佐賀大学	106	97	91.51
38	日本医科大学	116	106	91.38
39	弘前大学	110	100	90.91
40	信州大学	118	107	90.68
41	北里大学	117	106	90.60

大学名	受験者 (人)	合格者 (人)	合格率 (%)
岐阜大学	95	86	90.53
東京大学	103	93	90.29
近畿大学	113	102	90.27
香川大学	91	82	90.11
東京女子医科大学	111	100	90.09
九州大学	111	100	90.09
金沢大学	108	97	89.81
鳥取大学	98	88	89.80
浜松医科大学	125	112	89.60
三重大学	122	109	89.34
奈良県立医科大学	103	92	89.32
高知大学	109	97	88.99
京都大学	118	105	88.98
和歌山県立医科大学	62	55	88.71
大分大学	106	94	88.68
琉球大学	127	112	88.19
北海道大学	108	95	87.96
岩手医科大学	107	94	87.85
川崎医科大学	106	93	87.74
愛媛大学	106	93	87.74
杏林大学	97	85	87.63
東北大学	113	99	87.61
島根大学	110	96	87.27
熊本大学	116	101	87.07
東京医科大学	122	106	86.89
大阪医科大学	105	91	86.67
山口大学	119	103	86.55
獨協医科大学	131	113	86.26
徳島大学	89	76	85.39
鹿児島大学	106	90	84.91
東海大学	122	103	84.43
愛知医科大学	122	103	84.43
広島大学	115	97	84.35
金沢医科大学	121	101	83.47
兵庫医科大学	118	98	83.05
帝京大学	117	97	82.91
長崎大学	114	94	82.46
藤田保健衛生大学	113	90	79.65
福岡大学	134	99	73.88
認定及び予備試験	52	20	38.46
計	8,602	7,742	90.00
	世・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学・学	大学名 (人) 岐阜大学 95 東京大学 103 近畿大学 91 東京女子医科大学 111 九州大学 111 金沢大学 108 鳥取大学 98 浜松医科大学 125 三重大学 122 奈良県立医科大学 103 高知大学 109 京都大学 118 和歌山県立医科大学 62 大分大学 106 琉球大学 127 北海道大学 108 岩医科大学 106 環状大学 106 愛媛大学 106 愛媛大学 106 変様大学 106 変様大学 106 変様大学 106 変様大学 113 島根大学 113 島根大学 110 熊本大学 110 東京医科大学 105 山口大学 119 獨協医科大学 105 山口大学 119 獨協医科大学 122 大阪医科大学 105 山口大学 119 獨協医科大学 122 大阪医科大学 105 山口大学 119 獨協医科大学 122 大阪医科大学 125 電景大学 116 東海大学 126 東海大学 127 長崎大学 118 帝京大学 117 長崎大学 114 藤田保健衛生大学 113 福岡大学 114	レー・ レー

浜松医科大学医学部医学科卒業者の医師国家試験合格状況(年次別)

年 次	試験	卒業者数	受験者数	合格者数	不合格 者 数	合格率 (%)	全国順位	全国平均合格率(%)
						(%)		行俗学(%)
昭和55年(春)	第69回	82(6)	82	79	3	96.3	3位	80.4
昭和55年(秋)	第70回	, ,	3	1	2	33.3		
昭和56年(春)	第71回	94(9)	96	88	8	91.7	8位	75.6
昭和56年(秋)	第72回	01(0)	7	6	1	85.7	0 [12	70.0
昭和57年(春)	第73回	101(11)	103	96	7	93.2	3位	71.4
昭和57年(秋)	第74回	101(11)	7	4	3	57.1	011.	71.1
昭和58年(春)	第75回	99(5)	101	98	3	97.0	5位	84.9
昭和58年(秋)	第76回	99(3)	3	2	1	66.7	9117	04.9
昭和59年(春)	第77回	104(7)	105	101	4	96.2	8位	90.0
昭和59年(秋)	第78回	104(7)	4	2	2	50.0	8111.	86.0
昭和60年	第79回	91(18)	93	92	1	98.9	3位	85.6
昭和61年	第80回	87 (23)	87	87	0	100.0	1位	83.6
昭和62年	第81回	104(19)	104	101	3	97.1	5位	86.2
昭和63年	第82回	94(19)	97	90	7	92.8	11位	81.2
平成元年	第83回	100(33)	106	102	4	96.2	4位	88.0
平成2年	第84回	100(35)	103	98	5	95.1	6位	82.9
平成3年	第85回	96(30)	102	95	7	93.1	7位	84.1
平成4年	第86回	101(19)	108	98	10	90.7	12位	84.0
平成5年	第87回	105(30)	115	111	4	96.5	11位	90.0
平成6年	第88回	118(26)	122	110	12	90.2	29位	86.2
平成7年	第89回	100(22)	112	102	10	91.1	24位	86.0
平成8年	第90回	93 (25)	103	96	7	93.2	28位	89.3
平成9年	第91回	101(23)	108	102	6	94.4	12位	88.1
平成10年	第92回	96(31)	102	98	4	96.1	11位	89.6
平成11年	第93回	102(45)	105	102	3	97.1	1位	84.1
平成12年	第94回	92 (34)	95	80	15	84.2	23位	79.1
平成13年	第95回	92(36)	106	100	6	94.3	20位	90.4
平成14年	第96回	108(24)	113	108	5	95.6	19位	90.4
平成15年	第97回	107(33)	112	102	10	91.1	39位	90.3
平成16年	第98回	93 (44)	103	96	7	93.2	22位	88.4
平成17年	第99回	95 (38)	102	94	8	92.2	29位	89.1
平成18年	第100回	116(40)	125	112	13	89.6	50位	90.0

カッコ内は女子で内数

浜松医科大学医学部看護学科卒業者の保健師・看護師・助産師の国家試験合格状況(年度別)

保健師国家試験

本格書數 本格書數 本格書數 本格書數 本格書數 本 中 日 日		<u> </u>			华			臣		A 校 孩	今屈亚格
第85回 子格音數 合格率像 会级有限 会级有限 会易 会別 会別 <td></td> <td></td> <td>本業者数</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1 1</td> <td>S L H</td>			本業 者数							1 1	S L H
築85日 (27(12) 57(12) 93.4(100) — 100 第 第 </td <td></td> <td></td> <td> </td> <td>受験者数</td> <td>合格者数</td> <td>合格率(%)</td> <td>受験者数</td> <td>合格者数</td> <td>合格率(%)</td> <td>(%)</td> <td>合格率(%)</td>				受験者数	合格者数	合格率(%)	受験者数	合格者数	合格率(%)	(%)	合格率(%)
第86回 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(10) 75(100)	平成10年度	第85回	62 (12)	61(12)	57 (12)	93.4(100)	1	1	1	93.4	94.4
第87回 65(10) 66(10) 60(10) 60(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 66(10) 67(10) 95.5(100) 7(1) 6(1) 85.7(100) 1 66(7(10) 66(7(10) 85.7(100) 1 6(10) 66(7(10) 66(7(10) 66(7(10) 95.7(100) 1 0	平成11年度	回98	75(10)	75 (10)			4	လ	75	92.4	2.06
第88回 69(10) 68(10) 62(9) 68(9) 6(1) 66(100) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 68(10) 88.5(100) 2 1 0 第91回 70(10) 70(10) 67(10) 98.5(100) 3 2 66.7 100 第92回 72(12) 71(11) 67(10) 98.5(100) 3 2 66.7 100 第82回 72(12) 71(11) 67(11) 94.4(100) 3 2 66.7 66.7 第82回 62(12) 49 48 97.9	平成12年度	第87回	65(10)	65(10)	l		3	2	2.99	91.1	93
第89回 66(10) 66(10) 63(10) 65,5(100) 7(1) 6(1) 65(10) 65(10) 65(10) 65(10) 65(10) 65(10) 65(10) 70(10) <td>平成13年度</td> <td>第88回</td> <td>69(10)</td> <td>69 (10)</td> <td>l</td> <td></td> <td>6(2)</td> <td>4(2)</td> <td>66.7 (100)</td> <td>88</td> <td>83.5</td>	平成13年度	第88回	69(10)	69 (10)	l		6(2)	4(2)	66.7 (100)	88	83.5
第90回 66(10) 66(10) 65(10) 98.5(100) 2 2 100 第91回 70(10) 70(10) 67(10) 95.7(100) 1 0 0 第92回 72(12) 71(11) 67(11) 94.4(100) 3 2 66.7 第8日 本業者数 本業者数 合格者数 合格等级 会格等级 合格等级 合格等级 会格等级 合格等级 会格等级 会校等级 会校	平成14年度	第89回	66(10)	66(10)	63(10)	95.5 (100)	7(1)	6(1)	85.7 (100)	94.5	91.5
第9日回 70(10) 70(10) 67(10) 657(100) 3 2 66.7 第92回 72(12) 71(11) 67(11) 944(100) 3 2 66.7 10 数 本業者数 一 新 万 一 一 第8回 62(12) 49 48 97.9 一 一 一 第8回 65(10) 65 65 100 2 100 0 1 第8回 66(10) 56 55 98.2 1 0	平成15年度	第90回	66(10)	66(10)	65 (10)	98.5 (100)	2	2	100	98.5	92.3
第92回 72 (12) 71 (11) 67 (11) 94.4 (100) 3 2 66.7 同数 本業者数 本業者数 会餘者数 合格者数 合格名 自力 一	平成16年度	第91回	70(10)	70(10)	67 (10)	95.7 (100)	1	0	0	94.4	81.5
回数 卒業者数 新 本 本 財 本 本 財 本 本 財 本 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 数 本 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日 本 中 日	平成17年度	第92回	72(12)	71 (11)	67 (11)	94.4 (100)	3	2	2.99	93.2	78.7
画数 本業者数 合格者数 合格率(%) 要额者数 合格者数 合格者数 合格率(%) 一 <td>看護師国家試</td> <td>纸</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>)</td> <td>)書きは3年%</td> <td>(編入生で内数</td>	看護師国家試	纸))書きは3年%	(編入生で内数
月 数 千米日秋 受験者数 合格者数 合格率(%) 受験者数 合格者数 会校者数 会校表			7** 4* 4							合格率	全国平均
第8回 62(12) 49 48 97.9 — — — 第8回 75(10) 65 65 100 2 2 100 第9回 75(10) 65 65 100 2 2 100 第9回 65(10) 55 54 98.2 0 — — — 第9日回 66(10) 56 56 100 3 2 66.7 第9日回 66(10) 56 56 100 3 2 66.7 第9日回 66(10) 56 56 100 2 0 0 第9日回 72(12) 60 60 100 2 10 0 第8日回 8 4 4 4 4 4 4 4 第8日回 8 4 4 4 4 4 4 4 第8日回 8 4 4 4 4 4 4			- 华素有数	受験者数	合格者数	合格率(%)	受験者数	合格者数	合格率(%)	(%)	合格率(%)
第8回 75(10) 65 65 100 2 2 100 第9回 65(10) 55 54 98.2 0 — — — 第9回 65(10) 55 56 94.9 1 1 100 第92回 66(10) 56 56 94.9 1 1 1 第92回 66(10) 56 56 98.2 1 0 0 第92回 66(10) 60 59 98.3 2 1 0 第92回 66(10) 60 60 100 2 0 0 第92回 72(12) 60 60 100 2 0 0 第82回 72(12) 60 60 60 100 2 0 0 第82回 72(12) 60 60 60 100 0 0 0 第82回 72(12) 62 64 64 100	平成10年度	第88回	62(12)	49	48	97.9	1	I	ı	86	99.5
第90回 65(10) 55 54 98.2 0 — — 第91回 69(10) 59 56 94.9 1 1 100 第92回 66(10) 56 56 56 100 3 2 66.7 第92回 66(10) 56 55 98.2 1 0 0 第94回 70(10) 60 59 98.3 2 66.7 66.7 第95回 70(10) 60 60 100 2 1 0 第82回 72(12) 60 66 100 2 0 0 第82回 72(12) 60 66 100 2 66.7 0 第82回 72(12) 66 66 100 0 第82回 62(10) 6 6 100 0 第82回 66(10) 6 6 100 0	平成11年度	第89回	75(10)	65	65	100	2	2	100	100	96.4
第91回69(10)595694.911100第92回66(10)56561003266.7第94回70(10)605998.32150第94回70(10)605998.32150第95回72(12)6060100200第82回62(12)551000第82回65(10)551000第85回65(10)551000第85回66(10)661000第86回70(10)661000第86回70(10)661000第89回72(12)661000第89回72(12)661000	平成12年度	第90回	65(10)	55	54	98.2	0	1	I	98.2	84.1
第92回66(10)56561003266.7第93回66(10)565598.3100第94回70(10)605998.321500第95回72(12)60601002000第82回22(12)751000第83回62(10)551000第83回65(10)551000第83回66(10)661000第83回66(10)661000第83回70(10)661000第83回70(10)661000第83回72(12)661000第83回72(12)661000	平成13年度	第91回	69(10)	59	26	94.9	1	1	100	95	84.3
第93回 66(10) 56 55 98.2 1 0 0 0 第94回 70(10) 60 59 98.3 2 1 50 9 第95回 72(12) 60 60 60 100 2 0 0 0 0 第82回 李業者数 全験者数 合格者数 合格者数 合格者数 合格者数 合格容(%) 会験者数 合格者数 合格率(%) 会験者数 合格本(%) 会數者数 合格本(%) 会數有数 会數有数 会別 一 一 一 一 一 一 一	平成14年度	第92回	66(10)	26	26	100	3	2	2.99	98.3	97.6
第94回 70(10) 60 59 98.3 2 1 50 第95回 72(12) 60 60 100 2 1 50 7 [1] (本業者数 会談者数 会談者数 会校者数 会校者数 会校者数 会校者数 会校者数 会校者数 会校者数 会校	平成15年度	第93回	66(10)	26	22	98.2	1	0	0	96.5	91.2
第95回 数 卒業者数 新 本 本 第82回 数 卒業者数 合格者数 合格者数 合格者数 合格率(%) 受験者数 合格者数 合格格格(%) 受験者数 合格者数 合格格(%) 第82回 62(12) 5 5 100 0 — — 第82回 62(12) 5 5 100 0 — — 第83回 75(10) 5 5 100 0 — — 第85回 66(10) 6 6 100 0 — — 第86回 66(10) 6 6 100 0 — — 第88回 70(10) 6 6 100 0 — — — 第88回 70(10) 6 6 100 0 — — — 第88回 70(10) 6 6 100 0 — — —	平成16年度	第94回	70(10)	09	29	98.3	2	1	50	8.96	91.4
回数 卒業者数 新春春報 本格者数 合格者数 合格率(%) 受験者数 合格者数 合格率(%) 第82回 62(12) 5 5 100 0 — — — 第83回 75(10) 5 5 100 0 — — — 第84回 65(10) 6 6 100 0 — — — 第85回 66(10) 6 6 100 0 — — — 第86回 66(10) 6 6 100 0 — — — 第87回 70(10) 6 6 100 0 — — — 第88回 72(12) 6 6 100 0 — — — 第88回 72(12) 6 6 100 0 — — <td< td=""><td>平成17年度</td><td>第95回</td><td>72(12)</td><td>09</td><td>09</td><td>100</td><td>2</td><td>0</td><td>0</td><td>8.96</td><td>88.3</td></td<>	平成17年度	第95回	72(12)	09	09	100	2	0	0	8.96	88.3
回数 第82回 (5) (5) (6) (6) (7) (7) (7) (7) (7) (7) (7) 	助産師国家試	⟨ H¢							<u> </u>)書きは3年%	な編入生で内数
財 数 千米月数 合格者数 合格者数 合格者数 合格者数 合格者数 合格者数 合格容(%) (%) 第82回 62(12) 5 5 100 0 — — 100 第83回 75(10) 5 5 100 0 — — — 100 第84回 65(10) 6 6 100 0 — — — 100 第85回 69(10) 6 6 100 0 — — — 100 第86回 66(10) 6 6 100 0 — — 100 第88回 70(10) 6 6 100 0 — — 100 第88回 72(12) 6 6 100 0 — — 100 第88回 72(12) 6 6 100 0 — — — 100	九		4条件条件							合格率	全国平均
第82回 62(12) 5 100 0 一 一 100 0 第83回 75(10) 5 5 100 0 一 一 100 100 第84回 65(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第85回 66(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第86回 66(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第88回 70(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第88回 72(12) 6 6 100 0 一 一 100 100			- 千米白ダ	受験者数	合格者数	合格率(%)	受験者数	合格者数	合格率(%)	(%)	合格率(%)
第83回 75(10) 5 100 0 一 一 100 100 第84回 65(10) 5 5 100 0 一 一 100 100 第85回 66(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第86回 66(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第88回 70(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第89回 72(12) 6 6 100 0 一 一 100 100	平成10年度	第82回	62 (12)	5	5	100	0	I	1	100	91.6
第84回 65(10) 5 100 0 一 一 100	平成11年度	第83回	75(10)	5	5	100	0	1	1	100	6.3
第85回 69(10) 6 6 100 0 — — 100 0 第86回 66(10) 6 6 100 0 — — 100 100 第87回 66(10) 6 6 100 0 — — 100 100 第88回 70(10) 6 6 100 0 — — 100 100 第89回 72(12) 6 6 100 — — — 100 —	平成12年度	第84回	65(10)	5	5	100	0	I	I	100	93.4
第86回 66(10) 6 6 100 0 一 一 100 0 第87回 66(10) 6 6 100 0 一 一 100 100 第88回 72(12) 6 6 100 0 一 一 100 100	平成13年度	第85回	69(10)	9	9	100	0	I	1	100	88.3
第87回 66(10) 6 6 100 0 — — 100 0 第88回 70(10) 6 6 6 100 0 — 100 0 第89回 72(12) 6 6 100 0 — 100 100	平成14年度	回98	66(10)	9	9	100	0	I	1	100	89.2
第88回 70(10) 6 6 100 0 一 100 第89回 72(12) 6 6 100 0 一 100	平成15年度	第87回	66(10)	9	9	100	0	-	_	100	96.2
第89回 72(12) 6 6 100 0 - 100 100	平成16年度	第88回	70(10)	9	9	100	0	I	I	100	2.66
	平成17年度	第89回	72(12)	9	9	100	0	I	1	100	98.1

平成 18年3月浜松医科大学医学部医学科卒業者の就職状況

就職先等	人数	内 訳	
	人		人
大学附属病院	56	浜松医科大学医学部附属病院	36
		横浜市立大学医学部附属病院	5
		東京医科歯科大学医学部附属病院	4
		東京大学医学部附属病院	3
		慶應義塾大学病院	$\frac{3}{2}$
		名古屋市立大学医学部附属病院	1
		自治医科大学附属病院	1
		自治医科大学附属病院大宮医療センター	
			1
		順天堂大学医学部附属順天堂医院	1
		順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院	1
		埼玉医科大学附属病院	1
国公立病院	28	県西部浜松医療センター	3
		磐田市立病院	2
		袋井市立袋井市民病院	2
		藤枝市立総合病院	2
		国家公務員共済組合連合会虎ノ門病院	1
		独立行政法人国立病院機構静岡医療センター	1
		東京都立府中病院	1
		東京都立墨東病院	1
		東京都老人医療センター	1
		千葉県がんセンター	1
		沖縄県立中部病院	1
		東京都保健医療公社大久保病院	1
		焼津市立総合病院	1
		掛川市立総合病院	1
		静岡市立総合病院	1
			l
		川口市立医療センター	1
		大和市立病院	1
		茅ヶ崎市立病院	1
		豊橋市民病院	1
		岡崎市民病院	1
		蒲郡市民病院	1
		福山市民病院	1
		公立学校共済組合東海中央病院	1
その他病院	28	静岡赤十字病院	3
		聖隷浜松病院	3
		遠州総合病院	2
		聖隷三方原病院	1
		静岡済生会総合病院	1
		聖路加国際病院	1
		総合病院姫路聖マリア病院	1
		鐘紡記念病院	1
		愛知県厚生連安城更生病院	1
		取手協同病院	1
		関西労災病院	
			1
		京都第一赤十字病院 二世記今時院	1
		三井記念病院	1
		済生会川口総合病院	1
		千葉西総合病院	1
		立川相互病院	1
		八千代病院	1
		沖縄協同病院	1
その他	9		9

平成 18年3月浜松医科大学医学部看護学科卒業者の就職状況

就 職 先 等	人 数	内 訳	
1	人		人
大学附属病院	30	浜松医科大学医学部附属病院	15
		順天堂大学医学部附属順天堂医院	3
		昭和大学横浜市北部病院	2
		東京医科歯科大学医学部附属病院	1
		名古屋大学医学部附属病院	1
		京都大学医学部附属病院	1
		神戸大学医学部附属病院	1
		大分大学医学部附属病院	1
		横浜市立大学附属市民総合医療センター	1
		日本大学医学部附属練馬光が丘病院	1
		日本医科大学医学部附属病院	1
		東海大学医学部附属八王子病院	1
		北里大学医学部附属病院	1
国公立病院	11	県西部浜松医療センター	5
		神奈川県立病院	1
		岐阜県立岐阜病院	1
		静岡市立清水病院	1
		磐田市立病院	1
		神戸市立病院	1
		豊橋市民病院	1
その他病院	18	聖隷浜松病院	9
		聖隷三方原病院	1
		静岡赤十字病院	1
		遠州総合病院	1
		名古屋第二赤十字病院	1
		成田記念病院	1
		亀田総合病院	1
		福井愛育病院	1
		医療法人財団親和会 八千代病院	1
		あいち小児保健医療総合センター	1
保健所等	5	浜松市役所	3
		松本市役所	1
		瀬戸保健所	1
進 学	7	浜松医科大学医学系大学院看護学専攻	1
		浜松医科大学看護学科研究生	1
		静岡県立大学大学院	1
		愛知教育大学教育学部	1
		信州大学繊維学部応用生物学科	1
		徳島大学助産学専攻科	1
		岐阜県立衛生専門学校助産学科	1
その他	1		1

平成 18 年度への進級状況

1. 医学部医学科

区 分	2年生 -	→ 3年生	4 年生 -	→ 5年生	6 年生	→ 卒業
在籍者	104		111	 	119	
進級者		97		108		116
留年者	7		3	 	3	

2. 医学部看護学科

	2年次生 〔3年次への移行〕 (人)	4 年次生 〔卒業判定〕 (人)
在籍者	61	72
移行できる者	60	72
移行できない者	1	0



東洋的なるもの

解剖学講座教授

佐藤康二

最近、中国語の勉強をはじめた。ドイツ留学中 は、サイエンスより、やっぱりドイツ語と、かな り力を入れて修得したのだが、結局、帰国したら 全然実用の機会がない。それなら、浜松医大で もっとも実用価値のある言語はと考えた結果、中 国語とあいなったわけである。ところが、はじめ てみると、どうも勝手が違う。何か違う、どうも 違う。今まで、英語にはじまり、ドイツ語、フラ ンス語と、勉強してきたけど、その時と、何かが 明らかに違うのである。結局、ある日気づいたの は、これまでの西洋語は、読めるけど意味がわか らない、すなわち「表音文字」だったのだが、中 国語はその逆、すなわち意味は分かるけど、全然、 読めない。すなわち、私にとって、はじめての「表 意文字 との出会いだったからだ。読めないとい うのは、かなり苦しい、それにもまして意味が何 となく分かってしまうので、辞書を引くのも億劫 だ。というわけで、隔靴掻痒の感強く、一向に学 習意欲が湧かなかったのである。それでも、最近 漸く、教室の大学院生の王さんの忍耐強い教育に より、何とか楽しさを感じられるレベルまで到達 した。さて、今日はその中で感じたことをご紹介 したい。

まず、漢字の意味というのは、かなり正確に日本語に取り入れられているということである。それ故に、漢文というものが、成立しえるのであろう。従って、結局両者の違いは、発音と文法ということになる。王さんが言うには、日本語の漢字の読みは、古代中国の読み方とのこと、中国人から見ると、日本語は、古代中国語の博物館なのだそうである。だから、微妙に似ているものも多い。例えば、電話は「dian hua」だし、官僚は「guan liao」、民主主義は「min zhu zhu yi」である。とこ

ろが、絶望的に違うものもまたこれ多いのである。例えば、浜松は「bing song」であるし、佐藤は「zuo teng」であるし、小泉は「xiao quan」となるともう予測しようもない。おそらく、輸入したての頃は、もっと中国語と日本語の音は近かったはずで、唐に渡った弘法大師がすぐ中国語をマスターできたのも、あながち彼の高IQだけに帰することはできないであろう。いまでも、もし両国で同じ音を共有していれば。「我要烏龍茶」と言えば、ウーロン茶が直ぐ出てくるであろうし、「多少銭」と言えば会計もスムーズに行くはずである。

さて、文法もまた驚異的であった。まず、語尾の変化が無い。動詞の人称変化も、時制による変化も、冠詞の格変化も無いのである。大体、構造上、漢字に語尾は存在しようがないのである。それにしても、良くここまで簡略化できるなって本当に感心する次第である。これに比べれば、日本語はやはり、複雑である。あるドイツ人は、日本語はラテン語に似ているって言っていたが、これも語尾がころころと変化するところなのであろう。中国人の王さんが言うには、日本語にはよけいな物が多すぎるそうだ。

言語は文化そのものであるという、おそらく日本語は日本文化そのものであろうが、母国語として日本語を使う私には日本語を客観視することは不可能であり、中国語の学習を通して始めて東洋的ということを実感するに到ったというところである。



17年度基礎配属学生との記念写真 前列中央 筆者 前列 右端 王さん

リスボン雑感

基礎看護学講座教授

永 田 年

第12回国際感染症学会がこの6月15~18日に開かれ、ポルトガルのリスボンを訪れる機会がありました。今回は感染症学講座の小出先生や検査部の堀井先生も参加されました。全体的には現在世界規模で問題になっているエイズや結核をはじめとする種々の感染症の疫学研究やワクチン開発等が話題になっていました。学会で印象に残ったのは、オーストラリアのマーシャル教授によるピロリ菌発見のエピソードの特別講演です。当初ピロリ菌に関してまったく学会から相手にされず発表も拒否されたという苦労話が聞けました。小さな国を含めて種々の国の研究者が参加しており片言の英語で議論していたりと、米国の学会とはまた違った雰囲気でした。

さてポルトガルは、イベリア半島の西に位置し、 日本とはユーラシア大陸の両端という関係ですから、はるかに遠い国なのですが、種子島への鉄砲 伝来からはじまって、ザビエルによるキリスト教 の布教、天正少年視察団のポルトガル来訪など、 日本と関係が深い国です。ポルトガルの首都、リスボンは、大西洋に注ぐテージョ河という巨大な川の河口に開けた港町です。パリやベルリンなどのヨーロッパの町とは違い、どこか寂しい感じがしました。大航海時代にマゼランなどの探検家たちが活躍し、世界を我が物にしていたというのは想像しがたい印象でした。リスボンの街全体の建物の屋根は、レンガの明るい茶色で統一されており、サン・ジョルジュ城砦からの眺めは、一幅の



絵画を見るようです。街は、思うに長崎以上に坂が多く、その急勾配は並ではありません。細い街路が、縦横に入り組んでいます。特に、昔アラブ系、アフリカ系の移民が多く移り住んだ貧しいアルファマという地区が印象に残っています。この地区は、ひどく入り組んでおり迷路のようです。道といっても場所によっては、幅が1mたらずしかなく、両側から民家の白壁が迫ってきます。さらに勾配が急な石段が上がったり下がったりしています。



上を見上げると、各々の家の窓から無造作に青 や赤の原色の多い洗濯物が干され、特有な雰囲気 を醸し出しています。



またこの地区には、ファドと呼ばれるリスボン 特有の民謡を聞かせるレストラン兼酒場が多くあ ります。

アルファマのパレイリーニャというレストランに入ってみました。無愛想な顔に似つかわしくない白いかわいらしいエプロンをした中年のウエイトレスが忙しそうに働いていました。私は名物の干しダラ料理とヴィーニョヴェルデ(緑のワイン)をたのみました。9時になると男性のギタリストと一緒に出てきた黒い衣装をまとった女性歌手が

ファドを歌い始めました。心の中から搾り出すような歌い方で、どこか日本の流しの演歌と共通する点があると感じました。客たちもだんだんのってきて一緒に口ずさんだりしています。知らぬ間に夜も更けてきて店を後にし、若者たちで賑わうリスボンの夜道をホテルに帰りました。折りしもその日はワールドカップで決勝トーナメントへの

出場が決まって町中が沸いていたのです。

リスボンの街中のあちこちで、まだ幼い少年が アコーディオンを弾いてお金をかせいでいたり、 リスボンのエイズの子供たちのための募金活動が 行われていたりと、様々な社会問題の一端をみる 思いがしました。

海外渡航記

第10回国際斜視学会、 第30回国際眼科学会に参加して

眼科学講座助教授

佐 藤 美 保

今年の2月にブラジルサンパウロで第10回国際 斜視学会および第30回国際眼科学会が開かれた。 地球の裏側まで実に36時間のフライトである。空 港についたときは、全身殴られたあとのようにあ ちこちが痛かった。国際眼科学会の参加者はおよ そ10,000人、大きな学会である。ブラジルの母国 語はポルトガル語だが、ポルトガル語を話す人は スペイン語が理解できるが、スペイン語が理解で きるからと言ってポルトガル語は理解できない、 ということで学会の同時通訳は英語とスペイン語 であった。今回の目的は、アメリカ人、シンガポー ル人の医師と私の3人で企画したワークショップ に参加することだ。

学会の楽しみにはいろいろなものがある。学術 的な交流はもちろん、訪れた土地の観光名所を歩 いたり、名物料理をいただいたりするのも大きな 楽しみである。ブラジルの食べ物といえばシュハ スコが有名である。鶏や牛、豚、馬などのいろい ろな部分の肉をバーベキューにした串を高々と掲 げて、ウェイターたちがテーブルの間を回ってい く。食事はどれもとてもおいしかった。ただ、交 通事情の悪さと、治安の悪さには驚いた。どこに 行くにもタクシーを使わないと行けないし、一方 通行が多いので行きと帰りにかかる時間が大きく 違う。言葉がわからないから、運転手さんにだま されたかと思ってしまったが、あとでよく考える と、どうもそうではなかったらしい。「タクシー代 を値切ってしまってごめんなさい。」

ブラジル滞在中、最も感激したことは、日系人 眼科医たちのあたたかい歓迎であった。聞くと日 系人眼科医会が、一丸となって学会に訪れる日本 人眼科医のリストをもとに一人一人に担当者をつ けて、空港までの送迎や現地での滞在の補助をし てくれたという。ブラジルでは英語が通じるのは ホテルや空港だけで、レストランに行くのも、買 い物もするのも通訳が必要である。そんな心細い なか、彼らの優しさに本当にありがたかった。

サンパウロ大学医学部は授業料が無料なので、ブ ラジル中の優秀な学生が受験する。おのずと学生は 教育熱心なアジア人が多くなり、クラスの三分の一 をアジア人が占めるという。彼らの多くはプライ ベートクリニックに所属しており、一週間に一度大 学で診療している。もちろん無給である。「自分た ちは無料で大学を卒業したのだから、卒業後は無料 で後輩を指導するのが当然である」と言っていた。 結婚して仕事を続ける女性医師も大変多かった。 もっともこれは夫婦で働かないと十分な収入をえら れないからだとも言っていた。貧富の差は想像以上 であったが、苦しいなかでお互いに助け合って生活 していることがよく理解できた。

「近くて遠い国」があるように、「遠くて近い国」 がある。治安の悪さばかりがクローズアップされ るサンパウロであるが、今回の訪問で、私には、多 くの同胞たちがすんでいる「遠くて近い国」に なった。



現地の眼科医と



シュハスコ

「海外渡航記」のはずが、……

泌尿器科学講座教授 **大 園 誠一郎**

ある日、総務課のK氏から突然のお電話。聞くと、NEWSLETTER「海外渡航記」への執筆のご依頼であった。丁重にお断りしたが、どうしても今夏のオランダ出張の内容でということで、お引き受けしたが、結局、ボヤキ節になってしまった。

おおよそ、「海外渡航記」なるものは、出張先や 旅行先の観光名所や穴場巡りが紹介され、それを 読んだ人は興味を持って、次は自分も是非行って みようなどと思われるものではないだろうか。事 実、小生も、本誌に多くの方々が海外渡航先の出 来事、観光、名物などを面白可笑しく紹介されて いるのをいつも楽しく読ませていただいている。 そして、また、ゆっくり海外に行きたいなあと 思っていたし、特に自身が未踏の国の情報を得た ときは、機会があれば自分も足を延ばしたいと夢 を膨らませていた(そんな歳でもなかろうが。)。

以前、まだ前任地の奈良医大にいた頃は、イス ラエル・フランス・イギリス10日間の旅(イスラ エルで講演しただけだが。) や、アルゼンチン・ブ ラジル 2 週間の旅 (学会はアルゼンチンであった が。)とか、ドイツ、ブルガリア(これは、ホント に2カ国で発表。)1週間の滞在など、結構ゆっく りと贅沢に、いまふうに言うなら、セレブな旅を 楽しめた。当時の〇教授も、出発前は「たまには、 ゆっくり行って来い。」と送り出し、帰国後も「ご 苦労。」と寛大なお言葉をかけていただいた。しか し、いつ頃(確か講師時代?)からか、様相がまっ たく変わった。リヨンで発表、現地1泊のみでト ンボ帰りのフランス旅行、北京2日間、基調講演 と朝から晩まで会議続きの中国旅行などなど、数 えあげたらキリがない過酷な海外出張。これは、 決して予算の関係でも、バブルが弾けた関係でも なく、前後に学会発表や班会議などが入っており、 ギリギリのスケジュールで旅行社が作った計画ど おりの旅であったと思う。そして、前出の〇教授 が、帰国後にいつもおっしゃるお言葉は「どう。少 しはゆっくりできた? | であった。

さて、浜松に来てからの海外出張はと言うと、 さらに過酷なものとなった。赴任後しばらくの間 は、教室員が reject された学会に聴くだけのため にノコノコ出掛けるのは止めよう、せめて一人で も accept されるか、自身が何かの依頼を受けたと きに海外出張しよう、と自分に言い聞かせた。お かげで、赴任一年目は渡航回数ゼロに終わった。

しかし、2年目からは、教室員も米国泌尿器科 学会 (AUA) や国際禁制学会 (ICS) など難易度の 高い学会に accept されるようになり、小生にも 種々の依頼が舞い込み始めた。ところが、現実は、 済州島16時間滞在の韓国講演旅行(それでも、招 待してくれた旧友のK教授と夜2時まで呑んで騒 いだ。)、バンコク2泊4日ホテル缶詰状態の会議 ばかりのタイ旅行(それでも、帰りの空港に行く 途中、同行のA教授と像に乗り、二人で感激し た。) など。これも、すべて前後のスケジュールの ギリギリの調整のため。でも、行けるだけまだ良 い方で、もっと残念なことは、中国からの講演依 頼やモナコへ会議出席依頼である。とくにモナコ の招待は講演なしで、会議のみ参加の比較的 デューティの軽いもの。しかし、いずれも国内で 先約の講演や学会と完全にバッティング状態で、 泣く泣くキャンセル。一と言うわけで、こんな小 生の渡航記読んだって、何にも面白くも無いと、 冒頭のK氏には申し上げた次第であったが、…。

長い前置きになったが、今回のオランダ出張の依頼目的は、欧州泌尿器科学会(EAU)のサテライト会議に出席することと、その討議内容について日本の泌尿器科医向けの報告書を執筆することであった。当初いただいたスケジュールは、会議の前日に現地到着、翌日夕方のウェルカムパーティまで自由時間、その翌日から会議出席であった。オランダは初めての上、久しぶりにゆっくり観光もできる海外出張と喜んだのも束の間、親しいS教授から出発予定日の翌日に当たる日の講演依頼が入り、どうしても断りきれなかった。前述の中国、モナコ同様、オランダ行きも一度は諦め

海

たが、会議2日目からでも是非に、との寛大なお 誘いで行くことになった。すなわち、またしても 二日間(二泊)の会議で即帰国の過酷な旅の再現。

前夜、講演後に、S教授や悪友のK先生と遅くまで呑んだせいか、寝不足で成田エキスプレスに乗り込む。しかし、海外旅行の持つ一種独特の開放感に体は軽い。成田13:30発で、離陸後すぐにディナーの食前酒が配られる(もう、手術は終わったかなあなどと、一瞬脳裏を掠めるも、…。)。

アムステルダム・スキポール空港に到着した時 は、まだ昼下がりを思わせる日差しであったが、 現地時間は夏時間のため、すでに午後6時を回っ ていた。日本からの、A、K、T先生たちが夕食 を待ってくれていたのが唯一の慰め。でも、彼ら はすでに3日目の夕食を迎え、オランダにはあま り美味しいものはないから(小生は知らない!!) と、シーフードレストランを予約してくれていた。 セントラルステーション(東京駅のモデルになっ たレンガ造りの駅。)近くの、瀟洒なレストラン。 サンフランシスコで学会の時、必ずサウサリート まで足を延ばして行くお気に入りのシーフードレ ストランがあるが、そこに勝るとも劣らない味と 雰囲気を持ち合わせていた。T教授ご指名の白ワ インが美味く、結構みんなで騒いだため、ホテル へ帰り、バタン・キュー。

お陰でジェットラグもなく、翌朝は爽快に起床。 そして、悲しい性(さが)か、朝一番にまずメールを開く。考えたら成田を出てから、メールを開いてなかったので、学内・外・イタズラメールも含め未開封メールがドバドバ出てくる(わずか25-6時間なのに。)。一昔前のセレブな出張旅行では、2週間音沙汰なしで許されたが、今はメールがリアルタイムで入り、おまけに海外対応の携帯まで持っているため、ホントに便利なことがQOLを損 なっているかもしれない。とにかく、急ぎのメールを片づけ、ホテルのレストランで朝食。早速、EAUの大ボスD教授に出会う。昨日見なかったネの問いに、今回の強行軍を説明すると、彼も前回Tokyo 1泊でトンボ帰りだったと聞かされ、ただただ沈黙…。そして、会議出席。

二日目は、会議終了後、ファン・ゴッホ美術館を少し見る時間があった。ゴッホの生涯作品はもちろんのこと、日本の版画も結構な数が展示されており、ここは是非ともお奨め。そして、海外旅行の楽しみの一つのディナーであるが、今夕も先着の先生方のご意見を尊重してイタリアンレストラン。(結局、オランダ料理のレストランは知らないままである。)

会議が終わって、三日目は午後8時のフライトまで自由(開放感を味わえる最後のあがき)ということで、空港までの道中、木靴工場と風車小屋を廻った。ホントに廻って見ただけかもしれないが、本音はもう一度ゆっくり行きたい。最後に空港で、オランダと言えば、チューリップを思い出し、球根を思わず一袋買って機上の人となった。家に着いて、初めて判ったのだが、この球根は米国とカナダのみ持ち込みが承認されている代物であった。未検疫品の密輸入になるのだろうか?

* * * * * * * * * * * * * * * * * *

とにかく、この新米教授、まだゆっくり海外出 張できず、満足な海外渡航記も書けない現状であ る。小学生の頃、機会があってイギリスに40日間 滞在した。米国留学も2年の予定を3年2カ月間 に延長した。一そんな、若い頃のしわ寄せか、い まゆっくり海外にも行けず、ボヤキ節になった。 あと、何年すると、もう少し要領を得て、少しは 穴場情報もお伝えできるようになれるのだろうか。 (9/28/06 - 横浜市内のホテルにて)

卒業生だより

沖縄に暮らして

医学科 17 期生 (平成 8 年 3 月卒業) **熱 海 恵理子**

浜松医大を卒業し、早いもので10年が経とうとしています。私は今、沖縄で仕事と子育ての日々を送っています。沖縄に来て5年、こちらでの生活について、少しお話ししたいと思います。

私は第2内科に入局後、現在の主人と知り合い、 浜松医大第2内科、琉球大学第1内科双方の先生 方のご好意により、2001年琉大に籍を移しました。

始めの頃は、ラジオで沖縄独自の歌が流れていることや、日本酒のCMがない(みんな泡盛です)こと、米軍基地が多いことなど、何かと驚き、カルチャーショックを受けました。特に働き始めて最初に戸惑ったことは、患者さんの名前、先生方の名前が読めないことです。病棟のカルテの名前も読めません。鈴木、小林といった、本土では当たり前の名前に、こちらで出会うことはまずありません。こちらで出会う名前といえば与那嶺、喜友名、平安山(よなみね、きゆな、へんざん)などなど…。同じ漢字でも違う読み方のときもあり、また、下の名前も訓読みではなく、音読みが基本なので、始めは本当に困りました。今では何となくこつがわかり、だいぶ読めるようになりましたが…。

台風の洗礼も受けました。移住した年、台風は沖縄本島を直撃し、台風対策もあまりせず、のんびりしていた私は大変な思いをしました。夜暴風雨の中、洗濯ひもを取り込んで吹き飛ばされそうになるわ(うちは7階でただでさえ、風が強いのです)、ベランダに出るドアから雨水が浸入してくるわ、外の給湯器に雨が吹き込み、お風呂が使えなくなるわ、換気扇から雨漏りし、ガスコンロがつかなくなるわ、と散々でした。お風呂のガスがつかないため、翌日不動産屋さんに「台風で危な



いからガスの供給を止めたんですか?」などと質問して、あきれられたりしました。知り合いの方では、台風の際、病院の駐車場に止めておいた車に、別の軽乗用車が風で飛ばされてぶつかり、車が大破したという嘘のような話もありました。

仕事の面では、琉大の呼吸器科は「呼吸器・感染症科」なので、HTLV-I関連肺疾患、AIDSとそれに伴う日和見感染症、マラリアなど、以前に見る機会のなかった疾患もいろいろ見せていただき、大変勉強になっています。

一昨年子供が生まれてからは、私の生活も大き く様変わりし、現在仕事は週2日外来のバイト、 週1日大学での気管支鏡とその後のBAL処理(細 胞カウント、フローサイトメトリーでのCD4/8測 定)を行い、テーマを与えていただいて論文を書 いています。そして週末は主人のいる近くの離島、 渡嘉敷島に子供と行く生活を送っています。日々 表情を変える青く澄んだ海と空を見ると、本当に 癒され、心が解けて行く様な気がします。海の見 える土地で暮らしたいというのは、以前から漠然 と描いていた夢でした。実際に暮らしてみて、大 変なこともあるものの、この土地にきて本当によ かったと感じています。また、現在のようなス ローペースの仕事を許してくださる、第1内科の 先生方にも感謝しています。細々とでもいいから 子育てと両立しつつ、仕事を続けていかれれば、 と思う今日この頃です。

自然の中で…。

医学部看護学科 5 期生 (平成 15 年 3 月卒業)

西浦裕実

皆さんお元気でしょうか?

浜松医科大学を卒業してから早いもので4年が 経とうとしています。早いですね。働き出してか ら、1年・1日がとても早く感じます。充実して いるということでしょうか…?

医大に在学中は、ラグビー部に所属していました。思い出と言えば、暑い夏・浴びるように飲んだお酒・卒論です。懐かしいの一言です。

現在、私は地元(長野)で看護師として働いています。地域の急性期病院である当病院は様々な患者が入院しています。私は、脳神経外科・神経内科・内分泌内科での勤務です。患者のほとんどは、高齢者です。

「○○だに~。」「○○だな~。」とすっかり方言に浸っています。医師・看護師・リハビリ等の良いスタッフに囲まれ自由に仕事をさせてもらっています。そんな、のんびりした雰囲気ではありますが、戦争のような毎日です。死の現場に立ち会うことも、少なくありません。そんな時、この人に私は何ができたのだろうか?もっと何かができたのではないだろうか?と振り返ることが多々あります。脳疾患患者の多くは、麻痺・失語・意識障害があります。リハビリ病院へ転院して社会復

帰する方もいれば経管栄養での食事・呼吸器から 離脱できない方、何らかの援助がなければ、生活 できない方もいます。介護保険が充実してきたと はいえ、在宅の現場は厳しい状況が続いています。 その中でも、患者・家族の思いを聞き、その方達 が少しでも良い環境・状況で生活していけるよう 考えていかなければならないと日々感じています。

さて、プライベートといえば、自然に囲まれた 生活をしています。

長野といえば山山山…。春は桜の下でお花見・ 夏は、川でバーベキュー・秋は紅葉みながらきの ことり・冬は、雪の降る中ボードを楽しんでいま す。

去年の夏、スキューバダイビングの免許を習得しました。(一生縁のない世界だと思っていたのですが…。誘ってくれた方に感謝しています。)海の世界は、最高です。現実と違う世界に圧倒されます。海の青・空の青・白い砂・たくさんの魚達、そしてそこに漂う私。海に潜る度に、自然の大きさと自分の小ささを感じ、もっと大きな人間になりたいと改めて思うのです。海とは遠い地域に住むため、なかなか潜りに行くことはできませんが年を重ねても、1年に1回はこれからも行ければと思います。

相田みつをの書に「一生青春・一生勉強」という言葉があります。そんな人生を送りたいと思います。みなさん、お身体に気をつけお互い頑張りましょう。



編集後記

ニュースレターの今年度第1号をお届けいたします。玉稿をお寄せいただいた皆様に御礼申し上げます。 評価担当理事には「ヒョウカサウルス」について、わかりやすい説明をいただきました。新任職員の 方々の行間からは心強いエネルギーが伝わってまいります。そのほか、本学が国際的な存在であること を伝えるたくさんの話題、そして卒業生と在校生の皆さんからも活躍の様子をいただいています。皆様、 ありがとうございました。

少し前に、「**国家の品格**」とか、「**武士道**」という本がベストセラーとなりました。これらの書で述べられている内容と方向を同じくする言葉を、ドイツ・フライブルク大学からの留学生であった Iwischütz さんが紹介しています。本号 33 ページの F. Büchner 氏と L. Aschoff 氏の次の言葉です: 「日本と日本人の魅力の基本的な性格は、日本人の真面目さと『自然に対する畏敬の念』、そして慎みと思いやりによって形づくられている。」

真面目さと**自然に対する畏敬の念**と、**慎み**と思い**やり**と……。日本人が昔から重んじてきたこれらの 気質ほかを、私たちはこれからも大切にしていかなければならないのでありましょう。

> ニュースレター編集部会長 総合人間科学講座 (日本語・日本事情) 佐藤清昭

浜松医科大学ニュースレター編集部会編集 〒 431-3192 浜松市半田山一丁目 20 番 1 号 http://www.hama-med.ac.jp